



活語新話
 編三
 全

ホ 2
 617
 3



明加
617
94



らさるる御代乃をちりぬかほ書れ
形のおも物なるいのちをん目もきふ
きてまのわらへるせり昔はあは
ふく書生を法にうらむるかき
きりり〜らめ理ほ生おやう侍
わらをうらむる〜色をうらむる
ぬきひはむる〜ぬきひはむる
たよしてあはるる〜たよしてあ

かきこくをききしりていへりていへりていへりていへりていへり
もおほくしりていへりていへりていへりていへりていへり
うたはしりていへりていへりていへりていへりていへり
しりていへりていへりていへりていへりていへりていへり
さきさきとていへりていへりていへりていへりていへり
はりていへりていへりていへりていへりていへりていへり
うたはしりていへりていへりていへりていへりていへり
さきさきとていへりていへりていへりていへりていへり
はりていへりていへりていへりていへりていへりていへり

さきさきとていへりていへりていへりていへりていへり
はりていへりていへりていへりていへりていへりていへり
うたはしりていへりていへりていへりていへりていへり
さきさきとていへりていへりていへりていへりていへり
はりていへりていへりていへりていへりていへりていへり
うたはしりていへりていへりていへりていへりていへり
さきさきとていへりていへりていへりていへりていへり
はりていへりていへりていへりていへりていへりていへり
うたはしりていへりていへりていへりていへりていへり
さきさきとていへりていへりていへりていへりていへり
はりていへりていへりていへりていへりていへりていへり

月お晴ふくまのむしりるるを人のそと
おのりし部まをてた持をりし出
るおほるこつ山回あてゆりふくま
いし志ぬはしりたれゆりあま
くのもてらるおははるりのねりせ
うおまをさる講説あつる處を學寮六
條の言倉ふくまの持はあまふりら
ふしをさるふくまの持はあまふり

と志るく光るる阿波備白玉お
むしりるあはしりるうきりるあ
しりあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま

ふまゝに〜めさるゝぬれ海しつゝをさるゝ
もさうらう〜きふれつゝ海しつゝ
ら〜をよれ友得りや吾〜書
少〜然らるゝる雑話三編乃々
〜のふふ

庚子冬十二月望

大江東平

活語雜話之編叙

美つ英衲。若悟佛理。善善和學。
是以其不交。比有各名之士也。平
日毎々多相對。談話必及和學。
若少者。若於此。若其別自
筆録之。雖片之隻語。若其
不漏也。歲月稍久。巨帙若干

就矣。其中抽采和語用字
 者。更加自家之發的。整為
 卷。冊名曰活語雜話。皆萃二
 編。既已行于世矣。今茲吾家
 後。歆梓之編。頃日。携來
 示。余。且丐一序。余受而讀之。
 論 本朝之詞義。說漢上

活語雜話三編

随ひて拂へた別隨ひて生む。といむりんやう。げつこん
 べうもあらぬ。考ふるべきを。まゝて四方より。都りも
 より。来る。言の。採の。こと。ある。其。さ。め。ども。上。月。日。不。し。
 むれ。た。た。予。る。が。あ。ら。ぬ。を。と。幸。も。去。幸。も。あ。や。う。世。又。え
 ちら。が。く。め。さ。る。い。づ。れ。も。よ。お。ひ。なき。塵。埃。何。な。み。ご。う。し。や。人
 くる。らん。と。た。も。へ。た。居。さ。し。と。物。う。ら。又。さ。る。方。よ。う。を。い。れ。ひ。も。の。
 と。して。よ。い。あ。の。さ。さ。先。を。同。く。ま。る。友。と。さ。あ。さ。お。し。も。い。し。じ
 も。の。を。や。と。な。け。え。た。あ。ら。し。た。て。て。て。う。の。風。葉。た。ら。ふ。帚。の。松
 せ。る。あ。か。し。さ。り。さ。り。して。人。共。へ。た。ら。ま。さ。み。を。ま。さ。條。々。す。

オ三 (五六) 植し〜る

オ四 (五七) 人の話を人事を〜そのふ

ウ五 (五八) 親たを入こきてのこる子

ウ六 (五九) 相別アハレバ去者

ウ七 (六十) 将然言をばし受うる末のをさまりあぢちうハ定めい

れぬ歎サダの論め

ウ八 (六一) は文字して文まに截ぎる言してゆくと連つくままてい

又々文字をらても世別あると

オ九 (六二) うらがけ〜ま

ウ十 (六三) かな〜悲〜悲む〜み かな〜灰附 うらう〜氣

オ三 (六四) あさま〜附 あさむ

ウ七 (六五) かしをのこるのま〜つうふ不可

ウ九 (六六) 何しむけ何ぬけ

オ十 (六七) どりざりざりハよ〜ずありハいふの事

ウ二 (六八) かし可此二同じく口の活用なら可さ如くなくハいふ類也

ウ四 (六九) しが願辭自余〜矣なる越きある事附契冲師の恋〜妹の歎の事もが是の用格附て了をはの四の躰用此辨へ

ウ七 (七十) くく〜ひを〜む船流る水泡の類

オ九 (七一) かくに附不經の字を不觸の意の処用とれど経字

當る詞を羅行下二段活とハ執るまづき事

ウ十 (七二) 曰たませは曰ひまさせまどいへる詞の事

卅三 欲 わ

卅四 みどす みどす

卅五 用言躰言を虚字実字にしてつゞきての贅論

卅六 連躰言已然云の。そふみよりのかりよて。轉じて截断言とを

まろをなほもの語格を交る辭とくする例。

卅七 か か 人しゆよ

卅八 年智麻呂と御名と就て茂茂と云詞の形状と行用との

活きの事。

卅九 何ナぬる何ナつる。何ナぬる何ナつる。

卅十 又をれる沙そ女沙そ女

五十六 植うゑ

植うゑしうゑうゑといへる詞を釈ける古今集伊勢物語の註どもの高々中一。勢語新釈四のたふそいとよくふえられたる。然もあれどぬぬてをいふをのミ例七とせるもらぬてちひ。そなるとひくぬぬてを。皆只連用言をまねいへるよて。若これを四段の活なよて偽せむ。ううちちてといへるに間ま植うゑとていへるハも。行なとていふ詞うてなうババややゆゆたたと云へる例ナあるへたれハ上上のううゑハ連用言ナのううゑハ將然然云也。ささるると云やを詞うて受ると。ああと然ら然ざるをいへる也。文字文あて受るとの定りハ。あらゆる詞うと押涉りて。聊も茶茶れぬぬ傍傍ぞと思えり也。但但此初初一一とびハ連用言をなやすの辭の。

ことらけ。次ハ將然言を所謂未然を交る時の辭して受くる例を得
たやと。むい年高倉学寮にてくらふ友の有る時。がごとく同ト心コナ
り垂しを。後見當まるハ万葉十五。うるえーと思ひし思ひ。下奴は倍
つけ持てやまげあぬむせ。とあるを考ふる。げにゆさゆ。ばとの例にて。
るひく。あきくと云ハ全く同うらぬ也。さて和泉式部の「極あき思はる
うれそか」様。元又よしてをて人の未つら。とよまれんを考れぬ。
彼式部主などし。世元こそちらぬといへる。分の。むらめの五文字を解し、
たるをべての強む。の釈教の解乃かくなり。んと思えろん。どこの語
例をいへん。ハ。思ひして。ぬれしてといふ。詞も云。と云人よりハ。思ひ
思ひ。といふ。詞も云。といひ。例さん。方添宜る。へ。な。や。い。む。や。と。わ

のあ文字ある時。そ次なる詞を多くハ。際と交る例。玉緒なる考の
かくなり。中ふ。のたひ。うれ。む。若もね。と。已然云を交る。際も
あれど。世う。思しう。思。際のを將然言を交る。際なる。い。た。思ひ。思
む。い。の。も。それ。た。る。が。う。へ。二。軽く。だ。この。意を。含める。味ひ。さ。へ。うれ。と。これ
と全く同きをも思ひ合をへき事也。

(五七)人のむすむんことをしそふ

君をじそふ。と君をそ思ふ。人をしそふ。人をそ思ふ。にて。し。も。軽き
や。そ。め。辭。を。大。助。辭。の。を。な。り。事。ハ。難。む。く。知。て。ある。る。也。然。し。伊。勢。物
語。真。名。本。よ。う。の。四。十。八。段。た。る。う。う。う。こ。り。之。辭。し。け。よ。も。由。る。若。草。を。い
へる。分の。果。の。句。し。事。惜。と。書。る。と。惜。と。し。借。り。字。な。る。へ。き。を。此。字。に。返

みて愛惜の意とれりひて人の依人を惜うるとさける注のひがことなり由
ハ雅筵隨筆と云書二存けたるが如し。其惜しがれなきをを。一
そふと今。く。りトなくてハ叶をね格^{カダマ}り。和語説略圖を按^ア下てもあるべ
き也。松齋翁の新釈^ニ。一首のもべての意を釈して人のりのとならんこと
を惜くそふと云意を。う。く。み。縁むとゆるど。皆草の縁の詞^ニしていへるが
なりとあるハ。い。く。く。彼真本の惜字^ニ。注む説^ニ。紛るやうなるにつぎ。古
河教典これをうの公解の許^ニ。同例え^ニ。た。翁^ニ。よりいへる。を^ニ。はてはにを
ものを。ハやまめたる事勿論也。但し反奇の初草のれ趣^ニ。うけて。そ
の惣てハ惜くそふ心^ニ。う。されハかなひがとられむ。そこ示せるにこあれ
と云たくられま。されハ新釈更^ニ。うのま本の惜字^ニ。によりてやまめの^ニ。を。

く。芝。き。ま。た。れ。と。活。く。結。と。せ。る。こ。ハ。依。る。也。思。混。ふ。事。勿。論。也。さて夫根人言
活氏のうけりし雅筵隨筆と云る書の意にて也。此^ニ。う。く。く。みの哥を以。諸
注家^ニ。の結^ニ。人。事。を。惜。り。と。み。て。齊。襄。公。の。事。を。引。き。よ。して。云。く。
う。ら。う。の。誤。り。を。よ。れ。人。工。む。を。な。れ。婚。姻。せ。ん。こ。と。を。願。ふ。と。い。は。れ。し。と。云。
ひ。中。將。実。に。冤。か。る。哉。と。ま。て。い。へ。る。も。カ。ある。説。た。へ。つ。べ。し。但し世頼ふ
所^ニ。い。へ。る。ハ。か。の。さ。う。う。に。く。の。孟。子。^{滕文}_下。女子生而願爲之有家
父母之心人皆有之。といへるがとに注める中この証言なるべし。れど。を。し
そ。思。ふ。と。云。を。軀。を。そ。ふ。な。く。の。例。に。て。ハ。助。辞。也。と。い。へ。る。も。げ。し
習。ふ。なり。さ。る。え。哥。に。む。は。り。の。人。を。り。と。より。人。を。を。思。ふ。家。を。
そ。男。の。類。皆。同。く。を。も。ど。ふ。も。ト。の。助。語。な。る。こと。誰。し。ある。へ。ま。れ。し。

この伊勢物語を八真名本を見えて、情けりけるに依て、八ふとん語
 人狹有べし、これよりて斯まごころどき、さくよかむ。この雅隨より、
 情るらハを、たぬれど、こを
 情るらハを、たぬれど、こを
 情るらハを、たぬれど、こを

雅隨隨筆を、往くの年、大堀正輔のこれに貸しけるついでに、
 文字の事、此隨筆に、いへるやう、松冊子、こころ親を、こころ入まで、こころ
かほいをも、かほみる、かほあ、かほれ、かほなり、かほら、かほ世、かほ方、かほと、かほ不、かほ孝、かほの子、かほう、かほり、かほて、かほ祝、かほを、かほ法、かほ二、かほ押、かほ
い没、いた、いる、いが、い後、いと、い悔、いて、い傍、いを、い請、いい、い益、い供、いを、いと、いて、い作、いせ、いる、いなり、いとい、いつ、いと、いん、い清、い少、

(五八) 親を、入まで、このぬいの、
 のこころ、あ、

納まといへども、あやしく誤れることもあつめ、一首をよく玩味するに、親乃風
 波なむに遇て、船覆り溺れ死たるを哀むるへし、親を、こころの、こころこれ、こころも
 舟を、こころぞ、こころ思、こころふ、こころた、こころの、こころの、こころやく、こころ助、こころ辨、こころた、こころへ、こころし、こころ已、こころ上、こころ雅、こころこ、こころい、こころへ、こころる、こころも、こころ謂、こころき、こころう、こころと、こころ是、
 ゆれど、親をを、い、ま、の、れ、い、づ、れ、も、ま、さ、と、然、ま、を、つ、く、ハ、は、詞、つ、ま、を、を、
已上といへり、これ答へて、げ、い、さ、や、う、也、然、今、一、さ、ご、み、考、へ、入、ま、い、ん、入、
大堀加、し、活、く、を、自、然、言、い、て、入、
加、し、活、く、を、自、然、言、い、て、入、其、の、彼、方、の、れ、の、づ、う、ら、な、り、の、事、を、此、方、に、て、云、こ、も、使、
加、し、活、く、を、自、然、言、い、て、入、然、の、詞、い、へ、る、例、も、多、う、る、や、う、と、是、也、加、し、活、く、を、自、然、言、い、て、入、とい、ひ、し、る、け、り、さ、か、り、い、ま、む、
加、し、活、く、を、自、然、言、い、て、入、が、の、俗、云、よ、も、こ、が、子、の、う、せ、う、る、を、ハ、あ、ら、子、を、志、な、せ、て、い、い、へ、る、類、の、
加、し、活、く、を、自、然、言、い、て、入、事、つ、ね、よ、か、ら、す、そ、そ、こ、も、て、件、り、の、隨、筆、の、論、め、を、今、復、按、を、る、よ、先、
加、し、活、く、を、自、然、言、い、て、入、この、分、え、道、命、阿、闍、梨、の、な、を、繞、詞、花、よ、入、り、也、そ、も、繞、詞、花、よ、見、

てもうの松冊子にても春曙本に後ひまればたやをく。入てと。を字二にれ
む。一ハてををのを。一ハれ。のうものなるべきさふなれむ。さてハれ清少納言
の落。本よりひがことからて。雅隨中のひが論せるにやとも思ふれも。とへ
ての趣。大。されど猶 マこと親をハ沉めたどハハ 雅隨の説正。一ささる也。 さて又世方
一のくありて。子主此人うけたるもの也。とれもとるハ春曙 三句このぬ
ならぬ素本の冊子も同じを雅隨ハい々なる本に依れる。を。 をほよく考ふへし。

(五九) 相別去者

万葉八 ニ 波上従所見兒島之雲隱穴氣衝之相別去者 此句を並して拾遺
十 ウと見えさるハハハハハ。金岡ハ仁明天皇の御時
の人なりその人のうらふれハハハハハ。イヤ 此句を四句。あをいさつとと截断
言じていひまらたらハハハ末ををらひひひひのれ。或ハあひひひひれゆけ
とやうよよよへしとある人のいへるを先ハハげと覚え来とと又按上

さては世一首のてををくよくせゆるやうなれと。一がきに贈入唐使歌一
首並短歌とありて。その長とさましくさくねぬさまにまをしゆるくと
やれハ たしあさなる伊別往者てイツカレユタ
とよむべし。ユケハヨクたまこえがたり。 いといふ。一うあん。さらむひ別
まるむと古点の如くよまんと。ささるハ。さてあ四句よあなといひいさつ
いといひまらるもいさつとらる。今つらくたりハ。波上よりさゆる
こ。一ハのうもかれなを。さつ。あまこと。入唐せらるらんよと思へむ
いといさつと。一さぞとあるなるへたれハ。あなといへるハもとよりさつとへ
き也。さてさくよといひ切りて。次よあひひひひををしいへるハ。あういへ
る云外。よ。それはいさせんぞとやうなる余意を合めるにてあるへし。
上へうへりて。あは句をとまりとハ。えらべからん。かく考ふれハ古点

のまゝよていとよく聞えらるるや。

但し特然言を略し交をざり。截断言も

1. 月より一葉より一八二葉やらむと特然言にて才三句をいへるに、末て「今」
截断云て才四句をいへり。と云しき、捨断も通照僧正の言。才とていへり。いへり
し。花出はあはしつと、つんをばあはしつ。万十三葉を名し、若も立者惜こそ富士のさねの母とて、
と有なると、み(六) 条云く、如るれを今いひ、末のくり、改訂し考べし。世等の言、本は和語説す。

(六十) 特然言をたし受する末のをさまり。あまぐちよへ定め

いづれぬの論め。

不奪不厭

孟子梁惠三上

をウバハズンバアカズとよむとろり。末をアカズ

とよまんともらら。本を奪ハザレバとよむへ。本をズバとよむへハホ
をアカジとよむへ。御国詞をとらして字ハせざり。儒者のうけり
和語要領といふ書なむ。とらふ。がむ。うまの垂ハ弁へたり。さなるを戸
して。さよみ文くく人ハとれも。とある人ののひ来ハ宜せ。あハられ

ど又思の外なるもあるものにて。一偏二のみもいひてこれに似る例。

ゆるさめのも亦まれくさむることあるに。もあらむ。くれも弁へるべ
さる也。の遍照僧正のまてといふ。いともう。ち。猶古くハ万葉ハ

卷なる冗氣衝之相別去者よりこれハ同卷四 神佐夫等不許者ハあら

を秋草のとある歌の末結之紐手解者悲哭。こを旧印点コは、ムスビシヒモ

結びし紐をとり。ばとある人のよめるあどもさう。ぬ。ち。も。れ。を

ま。さ。か。か。か。さ。に。せ。る。り。の。に。て。こ。の。類。を。も。し。む。れ。ハ。栄。花。物。語。浦。別

卷。お。が。ろ。け。の。鳥。け。の。の。ら。む。を。出。す。人。事。く。し。い。へ。る。を

ど。これ。ら。末。を。と。と。と。さ。ろ。く。詞。せ。だ。上。ハ。な。ら。ね。む。を。へ。く。上。し。し

む。む。ら。む。末。を。か。さ。ら。ん。と。して。こ。そ。ら。る。べ。う。思。え。る。れ。ど。う。く。云。る

も一の詞づうひとず也。ついで云く引る詞の枚をうけし。枚がうけしぬを云
りも鴨りもしてぬ月よりおろのわく誓とも鳥とも何とも明もあらぬ妖怪の鳥
獸といふことにて、枚がうけのちりとのといへるよりやあらん。さて又から文よこすつて、
此スバといひまはといふやけちめやうのすくも、の年少べき事少うらむ山口菜コナ、
いひさうたぐひの事とも尚ひろくあつて、そてちよの要領だつ事とも和説踏踏トクと
いまあらん。

六一は文字して受る、さうく詞にていふとづくこと。

又は、ちからでも世別あるさ。

古今云、「なへありさ。うらむはあらぬとも。又とらんとも。」これら
を截る、詞のうなるを、又曰集、あるしらぬ。何うにやなく。又、「さう
うさる。花のさちらん。これらづく詞を、さうけし。ほづく詞を、射
を、ちからところ、ちのく似るつうひさぬせるめいせ。いづれも用語

よりながく、射言のさま云をての事といふをさまや、さる月の流る

まハ天川土佐日記、ちども然りも、されはさちといひて、ちめたる哥ども、の

あるが中、ハ、截断言して、其次、みゆらるもあれ、又ハ連射言
いひさうつさ、さちと云るも有也。万六、無て為利、ゆち、ハ、截、断、言、一、さ、ち、れ、而、有、所、見、を、
ハ、連、也、但、一、是、ハ、截、論、を、詳、説、四、巻、二、出、り、べし。

六二 うらむちま

美葉十九ハ、さうせ子う云、海石榴ウキハナ花咲宇良悲春之過者ナクハ、
を云、「まのされハ云、より改るよ、悲し、よ、上を、ま、れ、よ、な、ら、て、
まのまぐれを、のむ、射、したる、語、上、より、さへ、ま、さ、え、を、た、れ、ハ、こ、れ、
を、ハ、め、より、ま、の、事、を、云、て、ま、の、ま、ぐ、れ、を、い、ひ、る、よ、て、あ、る、
べし、され、つ、む、ま、花、さ、く、と、よ、む、へし、さ、て、さ、く、春、か、ま、る、り、て、

「うらみかち」も「むち」なりなどの例は同じなるべし。「あつ」夜引
つら」味なり
例也山口柔委く
図説せるがごとし。

(六三) 悲し^かき^ま 恋し^むき^み かき^み 家附^うつ^ら 氣

かち^くうま^くさ^いいへるも。畧^図に^二現在^正と^一必せる^二処^正字^一の行
よ入へき^二形状^一言^うか^らま^んう^らみ^かど^いへるも。同^図の^内に^二ユ^一
標せる行^二入へき^一作用^云たる差別^ハ明^なれ^も活^さぬ^ユ云^を
こ^ハち^れど。此^詞の^りの^りる^やを^いえ^んと^ま。そ^も先^の状^況
よ^かき^まと^いふ^ハ哉^いふ^ハ辞^をく^ちき^と活^りせ^るの^の思^はる。
其^哉とい^ふえ。れ^くう^いふ^もを^いふ^もん^と深^く感^がた^る
但^レか^ハ
連^聲言^或
ハ直^ニ轉^言つ^まて^出る^声。又^ハ必^裁
前^云つ^く斯^くて^邊る^時ハ^うら^みなる。よ^て喜^怒哀^樂い^つれ^もん^とあ^らわ^らる

が声^ニあ^まり^て歎^息せ^らる^音声^也り^り。され^ハ面^白く^めづ^る事^にも^ら
れ^たく^らゆ^ること^にも。ま^べて^らん^とあ^み入^るを^いひ^あら^せり^也
但^レ心^ニ感^じたる^が声^ニあ^まさ^るハ^うら^みも^もい^ひて^かき^とハ^をさ^しい^え
つ^ら。そ^れを^ニさ^らて^ハい^とあ^るく^ハう^もい^ひて^かき^とハ^をさ^しい^え
これを^バ又^レい^ふ詞^ハや^うハ^いえ^{ざる}を^案ず^る。同^ト歎^き
声^ちが^ら。軽^重と^ハつ^いて^重なり^も。重^軽ハ^まら^ぬ自^然の^妙なり。然^れと^も
あ^くあ^きと^いふ^詞して^そら^うら^みハ^むら^うら^みの^ミ云^ひ
て^かも^いへ^らる^さて^あら^も哀^むとい^と切^るる^人の^情なり^發ふ
云^なれ^ハ今^{これ}を^誤認^して^んハ^さら^なる^へ。ま^づサ^ラク^オモ^シ
ロ^イとい^へる^心なり^あら^ま。古今^集サ^ミチ^のく^もい^つく^ハあ^れと^塩ら^ぬれ
浦^こく^船の^つち^てか^るも。又^後の^奇に^も録^倉右^大臣^のの^りま^の

艇のつまでかゝるし」とよませんかしこれなり。こハ漢字ニあるく
む。堪憐可憐。まゝ愛たしるやあるらん。さてムゴラレイヤラくと
そへきあり。古今集十六。あをたふさうであそむよりもなき
とこニ人君そくさしき。これハスゝ書していしく明。ムゴラレイ
の言見えたり。又伊勢物語^{六十}。さうりもとあふらんこそあしりれ
と見えたるなり。同例也。古くハ万葉十五。ちりむちの敷もあら
ぬあふし思ひまらん妹。可奈思佐のたぐひ影。又愛ラレイ
イトホレゲナとまへきあり。万葉八^十。難波邊一人のあつれハ後れ君を
春葉つむ子を見之悲也。源氏處女卷。笋の琴云限。くかたし
とたがしたり。又夕貞卷。まがかりとたもふ娘をつらうまつらせばや

くたもひ云。又これコトも思えられどる。聊談談々なり。ダイジ
ダイジとまへきあり。万葉十四。コトもさうの葛飾。マセを新嘗衣とむ
その可奈之伎乎。とてさめめ也。こハ大事の吾背子を門外ニまをん
やえたり。又俗言。コトつねコナレイといふ。同く愁歎せざるをいへる
えこし。例をいふまでもなく。諸書ニ多かるも也。うやうさう
あるが如くたれど。いづれも見るとつけさくよつけ。んよ深くあふま
る喜怒哀樂愛惡欲の情よりいへるなり。さて上の件。いへるは皆
秋^秋言^言。詞かろを。作用の詞。さて今。さざみこまうにいも。そハムゴ
ラレガル。カアイガル。重宝スル。大事カル。た。誘譯をへき。さて。万葉十五
可奈之伎吾子云乎之美都々可奈之備伊麻世云。この初カ。た
形。言。か。り。

見えたる可奈之備たがふとてよくよく活きてある作用也。任
四段活くを波行汚音うつりてハ中
二段のたがふまじをまじも多し。和語灯録四。人の親の一切の子をうか
 へむ。其中より子ありけり。子もけりとも。慈悲をなれと云
 へども云。この文よりへり。とも。慈悲をなれとあるが。即次上りて
 志むとあるにて。この悲心招喚の慈字の用格に當りて。こたつね。慈
 歎悲泣まざるをカナシムといへるとは。同く。文のつゞきに「かきみか
 ら悪む也」ある。処より哀字あてけり。沙石集六上。大地獄三右おちて
 無量却の苦をうり。事のうり。さ。我身のり。志まてかくいふと
 ある。才のり。忘れて他の盗人のうへをいへる。か。れ。か。か。り。ま。
 ム。ゴ。ラ。シ。サ。あり。う。く。や。く。ま。る。世の書にも尚さる。つ。ひ。さ。ぬ。も。あ。る

を。い。つ。う。う。せ。た。る。さ。ぬ。よ。て。今。ま。ま。自心の慈歎悲痛の事はのミ
 り。あり。ま。ま。こ。や。右。沙。石。の。ま。い。も。あ。る。形。状。な。れ。ど。忘。ハ。右。い。へ。る
 か。く。な。れ。バ。こ。れ。を。作。利。云。か。き。む。或。ハ。う。な。う。ま。る。な。ど。い。ま。ん
 し。同。一。意。な。る。へ。さ。こ。と。あ。る。へ。つ。い。ど。い。ま。ん。万。葉。か。き。け。い。い
 り。と。み。ん。た。る。も。を。り。り。り。二十卷七。つくも。れ。の。さ。あ。る。の。花。の。也。こ
よもかき家妹い昼も登そ夜ひ夜る夜も夜ち夜。十四卷世二又卅四又十三。家夜祁夜二字ともケ。こ
 あ。て。たり。と。み。て。東。哥。也。あ。う。く。い。へ。る。め。の。と。人。た。わ。く。あ。や。め。う。そ。む。く
 う。な。り。さ。の。さ。ハ。く。く。活。く。音。う。く。活。用。ま。る。音。ど。も。ハ。東。哥。な。り。と。て
 さ。の。ま。い。と。異。あ。る。もの。と。け。れ。も。ま。れ。ど。万。葉。へ。越。白。波。を。へ。祖。志。ら
 波。う。ね。旬。ふ。豆。を。う。ね。は。保。豆。と。う。け。る。か。ど。ら。れ。く。れ。あ。ま。ど。よ。く。ま。ん。た

それらも祖^一⑧保^二⑦の音なりて、あや^一き詞とも思われぬを今家
 祖^〇の字よりて、あ^一きをうけ^二けといはん、はいといふにぞや覺也。
 これよりて考ふる、祖ハ玉篇ニ渠宜切といふ、^⑨キともよむべきか
 らむや、家ハ正^一古牙切なれど、叶韻ニ堅溪切ともあること字彙
 にも也、^⑩ケイ^⑪つむきハ^⑫キなり、されハ家字ニまね、祖^一まね、かな^二
 きのま^三にあてたるにてそらるべし、尚いも、字彙ニ件^一りの家の叶
 韻の^二むとの切韻して、一の字に堅溪切といふがら、音注にハ音奇とい
 るをもいべし、字彙ハをべて正^一からぬ音も少らぬなめれど、これら
 上の^二ケイの説を助るこゝこそより、^⑬国名の安藝ケイ列、ハス
 ちれど、アケノ国といふぬをも思ふへし、よく考ふれば家祖とも^⑭キの

音^一を物せるなるへし、又ついで、この字、宇都久之氣麻古我豆波奈禮し、
 万二十の卅九乗^一なる、氣字なども、キなるへく、^⑮愛^⑯ま^⑰真子^⑱をいへる、^⑲そ
 有へさ^一う^二た^三く^四悲^五け、^⑳愛^㉑け^㉒ハ^㉓は^㉔ら^㉕ら^㉖ん^㉗し、^㉘氣^㉙を^㉚ケ^㉛との^㉜か^㉝る^㉞よ^㉟
^㊱さ^㊲ら^㊳ぬ^㊴ら^㊵し、^㊶即^㊷万^㊸葉^㊹二十^㊺卷^㊻の^㊼廿^㊽一^㊾丁^㊿麻^㊽氣^㊾波^㊿之^㊽良^㊾と^㊿か^㊽ら^㊾り^㊿て
 もあるへさ^一なる、^㊽真^㊾木^㊿柱^㊽なる^㊾一^㊿派^㊽や、

⑭ 六四 あさま^一附 あさむ

らさま^一といふ詞の事、これも活きさぬの論ハあらねど、つよところ、
 又もとのゆるやうをいひしものあるを、^⑳記せん、^㉑まづ^㉒卅^㉓詞^㉔の^㉕とき
 やう、^㉖こ^㉗ハ^㉘世^㉙猿^㉚賢^㉛といふたぐひの、^㉜実^㉝ハ^㉞痴^㉟鈍^㊱なるを云こと也、
 かつ、^㊲又^㊳ね^㊴ま^㊵といふる、^㊶あ^㊷ざ^㊸み^㊹草^㊺といふ草^㊻なり、^㊼針^㊽ありて^㊾怖^㊿るべ

さりのまればたぞまうの意なるを。れをあらざるをさし轉じ。まをみ
と物めて「らざ」といふと同例也と云ふとの二説のあるは。とも可
らばしわが評すりをせり。うの唯信文意の和語説を筆録志ての
上。又いって之が解釈ある委くと需め。ハ西廣寺將了也。それ。應
し。く。う。え。せ。や。う。是ハ源氏物語玉小櫛^五。一此言ハ善惡ともに俗
え。く。く。く。の肝のつづれもあど云意也。といふ注解。て先云はませ。
さて彼評せ。一兩説初なるも物。一淺猿とくけるをみて。借字といふ
事をた。一あ。う。ざ。ら。わ。ら。う。人。の云。か。する。か。る。へ。一。他邦の猿猴の言
をさへ牽強していふま。い。く。れ。ら。う。也。又あ。さ。ま。州。て。い。ふ。え。近世古
字者といふ流輩の中に。古言を多くいひとがる。一五十五音よりて。

もこれハ通音ある延約といふを考ていひ。え。ま。あ。う。の一説。一。ら。あ。を。
まも用あらぬひがこと。一。あ。ん。その也。え。え。右。ま。も。見。ま。せ。い。ま。ま
し。い。へ。る。詞。り。た。う。惶。怖。を。へ。さ。や。う。の。と。ころ。醜。陋。なる。事。など。小
の。ま。あ。ら。む。こ。そ。件。の。兩。説。も。か。つ。た。い。ま。れ。め。伊。勢。物。語^四。他。国。へ。ゆ。け。る。友
あ。さ。ま。い。たい。め。せ。く。月。日。の。へ。より。事。拾。遺。集^十。一。さ。を。鹿。の。つ
め。た。い。ひ。と。ぬ。山。川。の。あ。さ。ま。い。ま。ま。と。い。ぬ。君。う。を。と。あ。る。ら。れ。ら。え
余。り。い。え。く。の。意。これ。い。う。べ。お。せ。る。分。の。あ。さ。ま。い。や。い。へ。る。初。白。大。
た。び。と。い。ま。る。の。あ。さ。ま。い。ら。う。か。な。る。を。云。へ。ら。う。源。氏。若
紫^二。古。四。あ。さ。ま。い。ま。あ。そ。く。せ。の。木。と。ら。う。し。と。ら。う。ハ。言。語。道。断。云。ニ。イ。ハ
レ。ス。と。諺。訳。を。へ。さ。に。似。し。う。其。次。下。ある。命。ぬ。ハ。あ。さ。ま。い。と。ら。う。と。あ
る。ハ。ケ。シ。カ。ラ。マ。と。訳。を。へ。く。それ。より。若。う。あ。さ。ま。い。かり。を。れ。布。し。か

るに止る有る処の也。メツソウナとして置く。同巻の末つゝも。あさ
まうういささぬうと思ひつゝり」とあるハ。ヒト通りナラズとして置くべき
など。そへて猶源氏にもさあくななる中。のうくはくむあとも。又
てあむることといへるも少うらぬ。枕冊子。あさまうま物として別条の
うんていりあげたるまかの両説。ハ暢らぬ多し。鴨長明也。如
來の本願易行の極りを称揚讃歎をよめて。あさまうのやをさや」とい
へるハ。世に超たるとあとも不可説殊勝の意也。其語又深氏何れニ
編四の条に於て。又長明
いふ。うあさまうま物を
世詞して云へるも。即 発心集ハ。うらあつまさるりのども世人をうてはらう
とひざまつきてうやまふをみる。伊賀の男門モのもとよりををみては
ろくにおかえんやえあさまうとまのりも。とあるハ。俗にビツクリシテ

アキレミテ井ルとのみとて。同書。又。あさまうといひらふやと
かど尚らう。閑居友上ノ。男云。云。かくれぬ云。隣の里のもの云。山に入
たる云。行あひぬらあさまういりけるハといへ。其事也云。云。こ
えコレハケレカラ又と云へる心の也。又。を本降つた世の
このことと俗のま 沙石集印本六
ノ二。金五十
両云。あさめめたまう。まうにて取かしてとらせられたらまうのまう
あさまう。がりたり。といへるまうも。こるくいへる事として。ハ。解
せぬ。くまハまづ。咄を今世の俗言。うてくみる。トホフモナイ
又ケレカラ又又。ビツクリスルヤウナなど。誤して。こを穩。こきこめ。さあ
さて考ふる。あさまうのまう。ハ。このまう。いさまう。うやまう。つ
ま。孫始とまう。まうのまう。と。同く。以詞を活用せしむる助辞。して。今

元去く□あさと活く形状言あるをその上なるま○も○とま○む○め
 ともうごく作用言なりう○かくに世詞のもてるころあさとい
 へる○と○こ○こ○り○り○このまんこのむのこの□ね○み○ね○む○の○縁○れ○
 こそ准らへてありぬへ○さ○ら○ばあさまんあさみあさむあさ
 と活用さるる詞の古きころ○ありやとなすは宇津穂物語俊蔭卷
 一十二○五○三○て○云○さ○ら○げ○云○文をいと似なく作出○ても○時○
 一天下の人皆いひあささえて其たび俊蔭一人進士○成ぬ○源氏若
 菜○よ○ろ○つ○の○事○つ○けて○あ○さ○み○を○ど○な○不○古○書○も○に○多○
 る詞也○本家の書○てハ暮帰繪詞○不思議○ぞあさみ○り○と○み
 えたるかといつれもケレカラヌト感嘆ス○或もボツクリアキレ評○を

ど云俗言○あて○みる○よ○く○す○も○さ○世あさと云事を○な○お○よ○く
 考る○よ○も○と○さ○とい○ふ○こ○ゑ○も○は○と○れ○ど○う○く○や○う○の○ころ○あ○さ○ら○や○う○の
 言○な○ら○を○り○よ○自らそのころのあまりて出づる者多かり○り
 さ○ら○ぐ○の○さ○ば○い○う○の○さ○を○ど○彙○へ○て○る○べ○あ○も○固○より○発語の
 詞○よ○て○これ○も○内○よ○み○ち○なる○ころ○の外○よ○ら○ら○る○音○声○
クハぬらの出来やうの時 あ○れ○ハ○い○も○ある○さ○とい○ふ○よ○あ○とい○ふ○か○を○り○て
二サアといふもは一をな あ○さ○とい○ふ○語○の○なり○出○る○て○世あさと○い○ふ○を○た○ら○さ○あ○さ○ら○や
 う○の○ころ○ぐ○へ○なる○言○ある○を○それ○つ○ひ○よ○ま○み○む○め○と○活○用○して○め○づ
 る○こと○の○ま○く○と○り○く○い○ひ○あ○ふ○を○は○め○て○あ○さ○み○とい○ひ○警○て○評○判
 するやうの○事○を○も○警○て○あ○さ○む○と○や○ら○に○世○詞○を○用○る○事○と○は○なり○

直^ナくしてハあさむつ^{のつら}のつらもせやうい^はにぞや覚^あつ。その^おは
 一のひ^いのつらま^まと^はにとうべ^なるれ^一事と^いらへ^一も也。抑^これ
 を嘆^{なげ}美^みの方にも云^いつ^れば。俊^と蔭^{かげ}の進^{しん}士^しのな^りし^しう^いへ^るを
 を^ばい^くハせん。あ^いともよ^くも是^れ上^のい^へるめ^くを^そべて^一評^ひ判^{はん}ダカ
 ニスル^とい^ふ意^義の作^さ用^り言^をから^ぎや。是^{より}傳^へぜ^るあ^さす^一と云
 狀^じ狀^じの意^意愈^い明^めむべ^し。此^各記^一を^つる^後、鐘^の音^と以^せる^まを^んん^あお
 び^をへ^一牽^き強^ひて^一假^ま玉^小楯^の現^をも^とん^とず^る也
 い^ふら^う。お^ぞま^一ハ^らし^く恐^ろう^まハ^らる^たう^らを^や。
 (六五) か^をを^のこ^の意^意よ^つら^うり^一。
 履^うも^の花^学も^とぢ^られ^て其^にこ^もき^るや^の曙[。]此^ハ玉^葉集^よて^又
 たる^とさ^あひ^らら^やう。ま^よら^るを^履とい^ひら^うげ^るもの^にと

ぢ^られ^てな^りの^よべ^たれ^と。さ^よあ^らじ^にも^こら^られ^ぬと云^え
 意^意。例^のう^らへ^うへ^るて^にを^えよ^て、か^の人^めり^をま^うえ^あとい^へ
 る^にも^ら日^事と^覚一^とい^つぞ^や人^のこ^もて^一。鞆^中花^{とい}ひ
 舞^うて^一。み^やこ^けは^らさ^み一^花の^ねも^うけ^もま^まか^らし^の母^のあ^ら雲[。]
 と^よめ^る鈴^屋の^奇ゆ^り。と^いひ^をさ^きける^をり^に。あ^ひら^るん。卅^初五^忍ら
 く^えこ^やこ^のこ^うえ^の意^意ち^りへ^く。さ^るハ^ウの^玉葉^のを^も。花^よ鳥^よと云^え
 へ^とぢ^らら^る哉[。]履^よの^こに^もあ^らじ^にと^いひ^を見^てそ^れら^うも^うけ^る
 一^やと^れり^ひつ^ら幸^{あり}た[。]さて^一六^百番^奇合^をこ^つれ^ハま^ま曙^をバ
 充^定家^々よ^て。履^もも^花学^よま^ま。右^家隆^也。履^もも^未の^まつ^はの^めく
 と^ほろ^とま^まか^らし^の判^いと^さく。履^もも^とれ^{ける}。

花のよかえあど云べきよや。む学よ閑られ宿の暁といへる也。秦城樓閣
鶯花裏と云詩の心と覚えて空くも侍るべし。あれど尚まけあしあ
れり也。されむのさうまといもまふきを。たぐはとねる也。判若こ
むひらんそれだも。佐若の心忘よてもありけめど。世こハ上よへる如く。
つねの上へへるか。とみてもゆゆるやうにたもあはを少くのおろ
さよや。但一のさうまの意をばうたとたくる。り。そ例なきりに
えつねなるへし。栄花物語御裳着。政。馬。くもりなき。君が御代
え天つそ。照こそつれ秋のよれ月。これハ。
主御門殿は太皇のたぐし。御代ハ
判若をさくりて。人よあよませ
言に。あれは。もる御代は。差よもまべく。せらざれば。照つら咽けさよ。たぐ君が肉
代のみうまの意とた。に思も。奇き。御代の照るを。あより。よて。空

の月もをめるといへるあらめ。かえハのさうまなることかべし。こよ。傍よ
り向ひて。
名のよのか。は。うら。へるのよハあら。た。た。う。く。を。を。へ。た。る。よ。世。風
ま。ま。月。ハ。代。ま。る。は。と。ま。ま。ハ。ら。う。さ。る。と。よ。人。あ。れ。は。そ。は。い。と。ま。ら。し。
か。る。例。も
あ。る。ら。に。う。の。系。極。黄。門。の。若。も。花。う。ま。と。ハ。も。と。より。花。の。さ。う。ま。の。意
にて。た。う。せ。む。へ。る。に。も。あ。ら。ん。う。よ。う。や。さ。や。う。た。う。こ。も。外。より。こ。さ。う。ん。上。の
件。よ。い。へ。る。や。う。に。花。な。く。ぬ。も。こ。花。の。意。と。て。一。首。の。飯。よ。く。け。ゆ。る
よ。ら。ら。ま。や。と。賞。え。し。う。む。は。事。を。さ。い。つ。と。し。松。舟。が。舟。よ。か。ら。ひ。し。よ。露
云。定。数。ハ。ハ。の。さ。う。ま。の。意。よ。み。た。ま。へ。る。な。る。へ。し。花。の。頃。の。暁。ハ。花。深
う。る。へ。き。時。ち。れ。ハ。な。り。さ。る。を。六。百。五。の。奇。合。の。判。よ。後。成。竹。の。花。う。ハ。と
た。ら。る。花。の。さ。う。ま。を。云。へ。さ。よ。や。と。い。ひ。た。ま。へ。る。也。花。う。ま。の。宛。の。か
たらぬやうなうまを。う。あ。し。と。な。ら。ず。古。例。あり。ても。さ。う。ま。ハ。さ。う。し

といひたきへんふふりしをさざむる判者をれはありといふれき
活語の話談とハかゝる篇吳るれども是も詞づひの心得の一なるむ。

⑥六 何くまげ 何れぬげ

先づ雑話⑥三 条ふむといふ約をげといひつげける例さざうにハ未
見當らざればバ云といへるよつて盛衰記③つやくおも覚えす
げ^四と云ええとるあどハいふと。貞風の云來一折も沙石集を
見居りし。偶然と^{十上}心ゆくも思ふべ^四げ^十とけりよぬれむと
らもといふへつ。但し猶も古泥処よりそハムおもひかざれど
それといふえらびおへさるこそけき。宇治拾遺④一何事ゆめぞと
もおもぬげ。よて「けりけり」といへるやさハウの清げ^十懸^十げ有りげ

など云とハ同トからばふと思まがへて誤らぬ^莫。彼覚えぬげのぞげ
を秋状言の有無の二の活にていふ。覚え無げ^ナ思ひ有りげ^ナといふ
も同く。思ふぬげハおえあるげ^ナなりひをさげとやういふも同く
て。さうろむへハもとよりにて。昔の清濁を同トかざる例ぞと語り
し事あり^ナ。此^ナ格^ナ子^ナといふ意味なるげハすべて連用云をさる定例なるを
不^ナたぬといへむ^ナ連^ナ弊^ナなる^ナ連用^ナ將^ナ然^ナ截^ナ断^ナと^ナ予^ナなるを考べし。

⑥七 ちざとざりといふ言をよし。ちざりといふことえ

いづの事。

友鏡答問 雑活三編 近江八幡 願慶寺主 をみて大牽僧のいひれせけるやう。いんか

ざりまの約りと思居りしをさハ匠しからむや。とけりにけりて。言の
急え然らねんことさうくもあらねど。玄察の活さうぬを精く正し傳を

べさえ此處等也。和語説略図よく見るとませ。と云やりしかど、まねて
まゝハ惣て截断連射のニ、用らきて、これを連用といへむまくとお
る。然るにハ連用截断連射の三をわぬまハ異也といふべきやと
ありたれハ然り。うへむくも図示をさせ。んも其三をわぬま處
件りの略図考へべき事ぞとかつりことしつをさて後此国人古河
教典に語りつれば、亦もそやくより。トをむあらんの約りとのむな
るるハ少いいうまぞや見えゆる。そもハざるべし。の約りなむりよべ
くハ付らばや。かく思ふなむ。凡そんも未然をたぐねむうま
まむへ。可も未然を縁めら。落着あむ。約りにもむるを。あ
もめら。トを。やとちつく。柄の氣うま。かとあまむを。みらとむ。ま。あ

らん^レの意として、まへべし。も形やうたれど、さてそておの意
趣何となく弱く、まゆるを、まて。トハつよき勢、つり、と覺
き中。まて、も殊、一首の趣切、その語勢のたもまら、みらやう
のなつ、及むぬ、やといひたるま。げ、味ひある論め、とそ思ふ。あうた
られど、今つり、考ら。凡そ、截断云なる事、自ら明なる上
に、又連射言をしかぬるま。友鏡、并、各向、いへるぬ。よせ、
物をや、まも、まじ。を、な、ま、かへ、まを。あ、射言へ、つ、ける時
の、ま、ま、ま、の約り。又うの意せ。トなど、やうに截したる方のハ、
ま、ま、ま、の約りと云へん。さるま、ま、ま、も、皆、イ、韻、の、音、で、
互、調、へ、る、な、り、と、だ、ま、れ、ハ、そ、こ、ま、ま、え、た、ま、と、又、ま、ま、み、細、

こいそく。べい。と。べ。と。ハ。截。断。と。連。躰。と。の。二。カ。ラ。を。此。ト。ハ。其。連。躰。截。
断。二。の。み。を。ら。ひ。連。用。を。も。か。め。る。こ。と。さ。ま。い。へ。る。如。く。即。略。圖。ト。も。ら。ひ
たり。ま。る。ま。に。て。う。の。と。め。ん。と。め。ハ。花。の。ま。ゆ。り。或。ハ。ま。を。れ。の。也。
く。未。ま。づ。ハ。か。た。も。躰。ト。して。云。る。も。け。連。用。言。か。ら。う。ら。と。こ。そ。あ。ら。う
ま。さ。れ。ば。ざ。ら。ん。の。約。れ。る。也。但し。ぎ。ら。ん。か。ら。う。ら。と。こ。そ。あ。ら。う。と。も。約。ま。る。べ。た。れ。と。初。学。或。は。思。へ。た。れ。と。約。ま。る。上。と。て。日。行。音。の。釋。ま。る。ハ。お。の。せ。と。な。る。と。例。多。き。事。也。万。計。九。時。鳥。先。啼。朝。け。い。ち。よ。世。婆。こ。が。門。後。疑。自。語。り。進。止。外。也。な。ど。と。く。味。ひ。考。ふ。べ。し。さて。此。下。書。言。を。み。せ。し。ま。ば。此。ト。彙。へ。る。初。の。事。に。て。向。ハ。ま。か。り。ま。る。う。ら。と。と。又。う。の。大。牽。の。許。り。文。と。い。ひ。れ。て。せ。け。る。ハ。ざ。り。と。い。ふ。言。の。事。抑。の。の。又。乃。と。ら。ま。の。ざ。り。也。
有。と。略。圖。ト。標。せ。る。処。か。ら。ラ。リ。ル。レ。の。活。き。に。て。截。断。言。り。な。る。こ。と。あ。ら。う。れ。ど。ざ。り。を。が。ら。然。正。く。截。断。し。て。つ。ら。へ。ら。ん

が。物。ト。見。え。ま。ら。ん。例。を。と。り。う。り。れ。ハ。そ。ハ。采。花。月。宴。ト。朱。雀。院。を。脚。子。達。れ。も。し。ま。さ。ざ。り。た。い。王。女。脚。と。け。え。け。る。事。を。ら。に。云。こ。れ。ら。也。と。云。ひ。や。り。し。る。也。扱。又。此。つ。い。て。亦。い。ま。ん。活。指。ト。頭。し。た。る。如。く。ざ。れ。と。希。求。し。せ。る。ハ。を。り。く。又。え。其。外。ざ。ら。ん。ざ。り。例。く。ざ。れ。バ。ど。も。ハ。夥。き。事。也。さて。何。ぞ。な。り。と。か。け。る。ハ。ざ。り。の。の。省。く。れ。る。に。て。ザ。ン。ナ。リ。と。よ。み。な。ら。ん。事。ハ。童。蒙。も。あ。る。事。に。て。そ。あ。り。ハ。う。の。声。を。ま。り。な。ど。の。ハ。う。く。ん。べ。る。也。な。ど。の。あ。る。如。こ。れ。ト。類。ひ。て。ハ。ぬ。あ。り。と。い。ふ。ハ。あ。れ。ど。ど。な。り。とい。ふ。ハ。あ。る。例。と。た。も。え。る。を。土。佐。日。記。ト。九。三。日。云。い。ひ。つ。ら。ゆ。り。の。こ。も。あ。ら。び。あ。り。と。い。ふ。こ。と。の。え。え。た。ら。一。本。の。あ。あ。る。ハ。必。写。誤。な。る。べ。き。理。り。此。活。指。の。格。例。に。て。う。く。あ。ら。う。さ。ハ。此。日。記。一。本。あ。ら。び。又。う。ら。び。ん。と。

みづく。これよりまうへりてハ山きみも凡をいみも惣てかうしてこれハ
けえぬハあゝぬやうにねぢ也。但し右一平せるニ一限らむ。俗言「ソレ
ヂヤニヨツテあどをべてみ。」とある次へいつても因故をあら
たひえを入れてたゞこれハよくせぬぞといひ来りし事「あん」と語
りし事之。抑古今なる長哥「まよいでむ人あうぬべみ」云。かゞさ
あまりせんまぶまみ「云。此べみハべし」云。よりとてまぐく。
まみハ無しそれゆゑとてまべし。さうぞと。この辭にこうじまんさ
てかのぬみべさあどいへることをさぐれたがえぬハたゞれのづく
「さう」造語のむう「さう」をこさうのみあるべし。さやうなるもの
いつれの詞も類ひあるものぞさてく「さ」と活く詞どもいづれも

思ひ維き聞場さなくやうに連用云かりひき。皆連用也。より
の字りなめるを。此可くたまべて截断言よりくる例。又如「ハまぐべて
連躰言或ハこれよりいふ辭つきてよりいひ連くる格りより。畧必にていへハ。此二語ハ「可
えまぐべての格の固ある段をバツ下へゆき」ハ段をニツ下へゆける
也。截断言をうくるさぬのまべて連用を「かまねるハ。此外もま
まぐべし。なまあらん。連躰を形状言にてうくるハ。此や「より外
「ハ更「まぐべし。秋まぐべし。やまぐべし。いひららまぐべし。さうこそあれ。万十
五卷九。秋まぐべし。故非之美。伊母乎いぬた「久くくまんをのく
か。此哥の旁二句ハ「まぐべし。妹を」と云べきを恋し。妹といへるあり
と余按二十「いへるハ。契冲阿闍梨の説あれど。然「ハあゝじ。此も從。悉し

トキハあつてはもがむ。はもがむトヤウニもがトハカツテモイハズ。コレ
ニヨリテコレヲミレバ。あがハイツテモ活語ヲ受タル願ヒニ。もがハイ
ツテモ躰語ヲ受タル願ニ。古今集ニ。うひぐねをさやもみ。が。金葉
集ニ。たぢま。ま。ま。麻をさ。あ。が。コレ。聞。モ見。モ活用。言。ニ。ヨツ
テ。が。ト受テもがトハ受ケズ。サテあ。う。に。木のめ。た。う。付。もが。を。向。人
もが。を。ナド。ガヤウニ時。チヤノ人。チヤノ。は。カレ。コレ。ナシ。ノ。躰。言。ラ。バ。あ。
が。トハサラニウケヌ。ハ童子モシルベク。ナホ。又。カノ。古今集ニ。あ。が。ハ
ふ。代。う。ふ。よ。も。が。を。人。の。心。を。ま。く。も。が。を。コレ。ラ。ミ。ナ。ト。モ。い。
モ。と。き。モ。ミ。ナ。活。カ。又。詞。ナリ。ウ。ゴ。キ。ハ。タ。ラ。カ。又。ハ。一。言。ノ。て。は。を。え。テ。モ。
ミ。ナ。躰。言。は。中。へ。入。テ。論。ズ。ベ。キ。ニ。仍。テ。ハ。土。佐。日。記。ナ。ル。と。ぶ。が。や。く。も。み

やこへもが。ナドモ何モイブカルベキ。ハナキニ。抑。て。を。え。は。四。ツ
ノ中ニテモ。てハ用言ノてアリ。又躰言。は。ニ。テ。アル。へ。キ。アリ。ソ。ノ。用。言。は
ベキハ。略。図。ニ。ア。ラ。ハ。レ。タ。ル。カ。ノ。つ。つ。る。ト。ウ。ゴ。キ。ハ。タ。ラ。ク。て。ニ。テ。き。き。て。
ル。ん。て。り。り。て。し。が。を。ナ。ト。ノ。て。ナリ。サ。テ。何。も。は。て。何。も。い。ナ。ド。ノ
てハ用言。ラ。カ。ザ。レ。バ。用。言。ト。ハ。イ。ハ。レ。ズ。其。て。ラ。ウ。ケ。テ。ハ。て。し。が。を。ト。ハ。エ。ヒ
ガ。タ。ク。ソ。レ。ハ。て。も。が。を。は。例。ナリ。サ。テ。て。を。え。ノ。中。ノ。ふ。モ。上。ニ。云。ル。如
ク。用。言。ベ。キ。アリ。又。躰。言。へ。キ。アリ。用。言。ノ。ハ。カ。ル。畧。図。ニ。ア。ラ。ハ。レ。テ
あ。ね。る。ね。れ。れ。ト。活。ク。ノ。デ。是。ラ。ウ。ク。ル。ハ。に。が。は。テ。に。も。が。ト。ハ。イ。ハ。又
格。例。ニ。又。躰。言。は。ベ。キ。ハ。是。レ。ニ。異。テ。ソ。ノ。ふ。ハ。に。が。ト。ハ。ウ。ケ。ズ。に。も。が。ト
ウ。ク。ル。ニ。世。中。ハ。つ。ね。も。が。も。あ。な。ま。さ。さ。こ。く。ナ。ド。イ。ヘ。ル。ヲ。ミ。ル。ベ。シ。カ。ノ。あ

そがあましもなり。い。ナドノ。トハ同カラズ。是ヲ互ニ置カヘ試ニ。あま
し。ありて。い。トハ云マシク。事。い。がもちトハサラ、云レザルニ非ズヤ。
カククリ返シクリ返シハウルサキヲナレド。語辭ノて。ニ用ナルト躰
ナルトノ有。ラ。初学ノ人モ能弁ヘオカル、ヤウニトクドキ置。サテ
語辭ノを。マ。ハ躰言ニテ用ラケルハ無。トナドモ皆躰言。ヨテ
トニ連ケルハ。ト云テ。ス。斯ノコトク。ハ用言ヲ受。ト
ハ躰言ヲ受ル。定リ。ト。マコトニハツキリトワカレタル。ト。但シ。コ。デ。
妨難メケル。ト。ライハ。ち。ち。が。ち。と。思ひ。る。又。云。あ。ま。む。む。が。ち。ナ。
云。ア。ル。が。其。ど。ヤ。長。く。ハ。用。言。ニ。ア。ラ。ズ。ヤ。ど。ハ。略。ニ。ス。ナ。ハ。チ。不。ノ。字
標シテぬ。ト。活用ノ。図アリ。長。く。ハ。略。ニ。無。ノ。字。ラ。シ。ル。セ。ル。処。ヘ。入

テミルベキ。ト。ト。ノ。活。キ。ナ。ル。ヤ。コレ。イ。カ。ン。ト。云。ニ。ナル。ホ。ド。コレ。ハ。元。來。用
言。ナ。レ。用。言。ヲ。躰。ニ。云。ヒ。ナ。レ。テ。カ。ノ。思。ハ。ラ。れ。ひ。の。ま。ト。云。ヒ。ち。ト。云
ト。ト。君。が。ち。き。け。る。が。く。な。り。ぬ。ナ。ド。云。時。ハ。行。モ。思。モ。用。言。ヲ。躰。言。ニ。シ
タル。モノ。ナリ。ソレ。ユ。エ。一。切。躰。言。ヲ。受。ル。辞。ト。モ。テ。受。ル。ト。ナリ。今。モ。ル
リ。ど。ト。云。ヒ。ち。ち。ト。云。ラ。躰。ニ。云。ヒ。ナ。レ。テ。サ。テ。も。ト。受。タ。ル。モノ。ヨ。ク
ヨ。ク。考。へ。抑。く。ト。ノ。活。キ。ラ。躰。ニ。云。ヒ。ナ。レ。タル。例。ハ。往。年。ノ。ト。ト
ち。やく。の。と。ト。云。ヒ。う。け。く。あ。ま。む。ナ。ド。云。言。アリ。又。ど。ハ。ツ。子。ノ。俗。言
ニ。モ。言。少。ニ。ツ。シ。メ。ル。人。ノ。ト。ト。物。い。ち。ぢ。や。ナ。ド。ソ。ノ。名。目。ニ。レ。テ。云。ニ
テ。マ。ツ。知。ル。ベ。ク。ナ。ホ。と。も。び。が。り。ナ。ド。沢。山。ニ。イ。フ。ト。ヒ。テ。更。ニ。疑。モ。ナ
レ。サ。レ。バ。ハ。活。語。ヲ。受。ケ。テ。ノ。願。ヒ。も。ト。ハ。躰。言。ヲ。受。ケ。テ。ノ。願。ヒ。ナリ。

カヤウニツカヒ方ニ差別アリテ其意バハ全ク同ク。タゞ願ノ詞ナリト云テ動カ又義ナルベシ。文詞ヨリカハたらんユハかつて初学の為ニ宜カク。或人の使書のまうにたらん。

(七十) くぐ鶯。たむ船。流る水沫の類

尾張より植松茂岳のいひれてせうるも。万葉の例。君ニ我コフ心示サ子ノ取。カス物シナケレハ。泊セ川ナガル水沫ノ。又ナカル。碎田ノ。衣手ノワカル。今夜ユナトナホアルラ思フニ。截ル。詞ヨリ躰言ヘツクル例モカノ集ニハアリトセンカト疑ヒ向フモノアラバイカニカスベキ。サテ詞ハ衝ニ加行四段活語ノツラニ。ト出シテ。古事記万葉ヲ奉タレド。何レモ其ヲミレバ。四段ノ活也ト云証ラ成セル語ドモニアラス。中二段ノ

カ四段ノ活語カ分
又ツケケナルノミ
サテ麻行ニテ。○たむト四段ノツラニアゲ。亦○たむるト中二段ノツ
ラニモ出セル詞ハ。カノ意ハニテ活キハ二方ナル例ノ詞トセルニテ。ソノ引
出タル証ドモ。謂レタリトミユレド。○くぐノハオボロナリ。今考ルニ。くぐ
ノ四段ナルヘキ証ハ。万七セ。あげみとび久久鶯の。ハ。このまたちハ十一
霍公。コレラニテ驗シ。シカハアレド又思ヘハ。こさたむ舟ハ。又こささ
むる浦の。云云ナドモアルニ准フルニ。万四。あささへの枕従久久流涙
ニ曾うまねを。けり恋の。げき。トアル久久流ハ。カノ。時鳥この
るたち久吉を。ぬ日丸を。ナト。同言ナルヘケレハ。コハモト中二段ノ
活語ト云ヘク。サテハ。既ク四段ナル
証トノミ思ヒシ
カノくぐ。鶯ナトモ四段活ナル故ニ。く。ヨ
リ躰言ノ鶯ナトヘツクルモノトイハンヨリハ。万葉ノ例ハスベテ今思ヘ

バタ^レ截ル詞ナルヨリ躰言へツクル例アルツラニ入レテサハたむく^レ
 トモニタ^レ中二段ノ活語ナルユエニく^レくんたまん^{トヤウニ明ニ} 又くけん^{段ノナル証モ}
 ためん^{サイハ下二段} ナド活キタル例モアラヌニテコレハタ^レ中二段ノ活語
 ナルゾトモ云ヘキ^ナとありけるハ^{既(四九)} 尚平のかさうぞふの説など似
 たる事か^レな^レく^レむ^レふ^レた^レむ^レより躰語へうつまるそハ皆四段活
 尚^平い^レく^レ中二下二にても万葉^ノそ^レハオ^レ三音より辨云へつ^レく例
 あり^ト茂^母あ^レち^レハ^レ其れもひ入^レまるや^レハ五^ノう^レう^レへ^レそ^レにわが
 た^レへるや^レをい^レた^レりしや^レ先躰語へつ^レけらん^ニハ^レそ^レを截
 る^レ言^レと^レハい^レま^レま^レじ^レ也^トさて^レ久^レ久^レ鶯^ノら^レ心^レ流^レる^レ水^レ味^レち^レど^レハい^レづ^レれ
 も^レ皆^レむ^レう^レハ四段の活^ノそ^レも^レう^レり^レによりて^レさ^レつ^レけ^レさ^レぬ^レも^レあ^レ

あり。也る觸るちどいづれも下二段の活なる方三音をば万葉なり
 久連躰云ともせりといつてへうぬ^レ非^レや^レとぞ^ト
ついでに云ふ所のなきがさのさ
も久の字は言をへさをもてハ
本校のすゝたる説述ひかたる鐘のひささゆれようめ
 (七一) ち^レく^レに^レ附^レ不^レ經^ノの^レ字^レを^レ不^レ觸^ノの^レ意^ノの^レ處^ニ用^レた^レん^ト經^ノ字^ニ當^レ
る詞を羅行下二段ノ活くハとらま^レき^レま^レす
 詞玉緒五卷^トち^レく^レに^レ標^レして^レ出^レせる^レ六^ノ首^ノの^レハ^レ何^レま^レも^レぬ^レこ^レあ^レて^レよ
トく^レま^レゆ^レら^レず^レも^レ也^ト勢^ノ語^ノ新^ノ叙^ノ一^ノ卷^トち^レく^レに^レハ^レま^レべ^レて^レぬ^レこ^レなる^レも
トの^レ説^レあり^ト然^レま^レとも^レ古^ノ今^ノま^レま^レを^レつ^レめ^レも^レそ^レま^レつ^レなく^レこ^レま^レず^レあ^レ帰^レる
トる^レこ^レま^レぬ^レと^レれ^レり^レハ^レ又^レ悪^レふ^レ命^ノや^レも^レ行^レぞ^レハ^レつ^レゆ^ノの^レあ^レご^レの^レを^レ追^レい^レ
トう^レへ^レを^レつ^レち^レく^レに^レこれ^レら^レぬ^レこ^レと^レい^レえ^レん^レよう^ノハ^レウ^レカ^レマ^レと^レみ^レる

方親しむまらウカヤ惜うらウカヤと訳せんぞいとゞえやまうるべ
 き。此なくこそをラウカヤと。北辺成章のあゆひ抄かき訳しことむなり。
 えてかのか抄。なくの詠譯三ツりり。又「モセヌ」ウカヤこれ也。此外
 もうの抄。うつし詞もの有り中。ハいよさそたなき。さてぬをなく
 とつハ。さく。をさくく。つ。つ。をま。く。以類くハ。う。山口
 某。い。へ。る。や。の。た。が。ひ。か。る
 べく。さ。え。なく。い。え。ぬ。よ。と。て。ま。さ。り。素。り。の。事。そ。と。こ。と。り。の。う
 と。より。も。た。も。え。る。れ。ど。大。空。を。て。り。や。く。月。一。清。り。れ。ハ。ま。か。せ。も。光。け
 なく。に。古。今。い。ま。の。う。み。あ。ら。う。ら。小。燈。の。ま。ま。ま。ら。れ。なく。に。日。巻。な。ど。も
 光。さ。え。ぬ。よ。と。の。ま。え。て。え。お。した。ら。ま。ぬ。ま。ち。れ。ち。ち。え。あ。れ。ど。こ。と。り
 の。う。上。い。へ。る。わ。く。な。る。け。り。や。又。う。味。へ。む。ね。を。て。く。ハ。ぬ。に。ぞ。れ

ちのめ。万葉集十一卷^{四十} 臨照難波菅笠置古之後者誰將著笠有魚
 國^{クニ}ちども。笠。あ。ら。ウカヤ。然。又。ハ。洲。の。意。な。ら。め。と。い。ひ。も。て。ち。け。え。ま。な
 ら。ぬ。よ。同。卷^六。又。朱。引。秦。不。經。雖。寐。心。異。我。不。念。これらハぬ。よ。と。て
 て。ハ。ふ。と。ハ。因。え。ぬ。哥。人。此。不。念。え。ウカヤ。と。い。み。ま。ら。る。や。く。ま。え。ぬ。と。て
 さんど。これら。い。ひ。ひ。り。て。ち。け。ハ。い。つ。れ。も。念。え。ぬ。よ。也。さて。北。辺。の。又。と。訳
 せ。ら。れ。よ。く。あ。ら。る。え。是。も。万。葉。十。一。卷^七。我。妹。恋。無。夢。見。吾。雖。念。不。所
 寐。こ。と。い。ね。ら。れ。又。と。載。と。て。見。る。ぞ。よ。く。早。く。さ。こ。ち。る。同。卷^八。又。何
 為。而。忘。物。吾。妹。子。丹。恋。益。跡。所。忘。莫。苦。二。これら。も。さ。ら。れ。又。と。也。か。く
 る。も。同。集。そ。外。ま。べ。て。少。く。ね。ど。か。わ。い。ひ。り。て。ち。け。え。何。も。皆。ぬ。よ。也。つ
 て。初。学。の。た。め。い。ま。ん。右。よ。り。る。が。中。に。不。解。の。ま。た。り。處。こ。不。經。と。く。ら。ハ。唯。フ。レ。と。よ。う。く。字
 を。つ。へ。る。の。こ。ぞ。經。字。よ。り。る。詞。の。ま。の。比。ハ。た。い。口。然。言。に。て。さ。ら。う。將。然。ま。ハ。あ。ら。さ。う。と。世。ま

よりもてぞとつまつらひいふ。或はまてて將然をこそうくる定りらんとそ。これをあや
 むり勿き。亦不示さ。勝手よりつら。多行四段のこ作らて。下二段の法
 らうぬ。問かれハ。かてし。ハ已然を以て。そのて。をバ。知ぬな。く。格。ハ。あら。を。ぬ。
 一ハ。た。より。つ。きて。う。ぬ。な。と。そ。り。定。り。な。る。に。万。葉。二。卷。上。の。ち。の。か。を。知。勝。奴。も。又。上。
 大。正。こ。う。と。を。入。不。勝。う。も。も。う。け。る。類。外。も。あ。る。を。み。べ。し。如。て。よ。す。れ。だ。と。を。知。勝。奴。を。借。
 て。難。し。用。み。さ。て。不。と。云。つ。け。る。之。り。不。經。と。あ。る。言。さ。お。全。何。ゆ。せ。う。し。延。れ。勝。て。を。バ。ぬ。や。と。
 受。を。れ。バ。て。下。二。段。の。用。言。と。思。事。勿。き。と。又。万。三。草。枕。云。家。侍。莫。國。と。有。さ。ハ。ひ。た。く。ハ。は。ら。ん。と。
 三。心。に。三。説。改。観。五。下。あ。れ。と。ハ。ま。さ。か。く。こ。て。莫。ハ。音。用。な。り。へ。し。ら。ハ。又。二。の。ち。く。と。セ。ま。と。云。え。ハ。遊。也。
 七二 曰まませバ。曰むまさせなだいへる詞の事。

敦賀よりきて。氣比大神の神づかさ石塚氏より。んれ語辭のささ
 ちあひらる。あらし資梁のいひけらく。玉敷に教りて後。を人の分
 文をみる。けす。をけませ。つくり誤りて。え。さ。げ。ま。多。し。
 然ここれと都へりけさる。ま。さ。と。い。ふ。と。す。せ。と。い。ふ。と。此。地。ハ。い
 づれならんとたどらう。がある。よ。く。縁。て。思。を。近。頃。ハ。ま。さ。と。云。

べきハ皆用えへ連く格の語をうけ。ま。ま。せ。バ。い。ふ。へ。さ。ハ。皆。將。然。の。君
 を受る例。うのかくむりこひんかひてあらませバ。五。う。ち。う。び。て。落。穂
 拾ふ。同。う。ませ。を。五。七。五。か。ど。の。ゆ。き。知。同。う。け。も。將。然。ら。ん。と。を
 々詞也。うのま。ま。を。い。ふ。詞。々。これ。を。う。け。ん。ハ。知。り。ま。さ。と。同。う。な
 さむとこそ云へま格にて。ま。ま。と。い。ふ。ハ。人。の。う。へ。を。云。ひ。詞。
 ませをハれのが。く。或ハ物のうへ。事。の。う。へ。にて。云。詞。を。け。ち。明。也。と
 ち。ハ。い。ふ。と。あ。り。け。る。ハ。よ。き。辨。へ。せ。り。と。れ。を。受。て。と。但
 猶。い。ま。ま。せ。を。ハ。佐。行。下。二。段。の。活。か。る。う。り。て。身。四。音。せ。を。む。と
 う。けて。け。こ。然。ん。と。ま。ら。を。縁。て。い。へ。る。意。の。詞。也。と。て。此。詞。丁。つ。り。や
 る用言の將然言より連くこと。大々この詞どもの通例。異なり。とて

定れる例のまゝに惣ての活きの連用言より云ふまゝに。佐行四
 段の用言「そ。げ」人の「へ」つけていふ教ひ詞也。己が上につけて向ふある
 ことを教ふよき世詞を用
 いる。今世も「思ふ」ハ「ま」を
 のをの省くれば「てま」別なり。これをうのまの「。あて交るをりハ。何ま
 」。との「ふ」へく。それをませ「。といハ。まらさこといへ」事乃
 者つるをり「。も。思ひ」けむ。新井村といへる上野人。いつ「。と略
 図演述の同書をみてのまざにて。それにつまていりく「。う」らひ
 木こせける文を披き「。ん」バ。知ら「。ま」せ。バ。まど「。のま」せを。佐行下二段の活
 きの「。給」めらる「。け」回「。ん」ハ。ま「。ハ」ま「。の省言」うの「。い」ま「。く」わ「。く」
 「。い」へ「。ま」を。い「。ま」か「。く」ま「。命」也。り「。と」よ「。み」見「。ま」く「。わ」を。み「。ま」か「。く」
 云らたぐひ「。こ」そ「。い」ま「。め」さ「。ハ」せ。ハ。例の佐行変格の「。志」連「。截」
 用「。ま」断「。ま」断「。ま」断
 断「。ま」断「。ま」断

活く詞の將然言のせにて。さうか「。く」それをハ「。む」ハ受たる「。く」也。
 との「。ひ」木こせらるを考へ「。ん」げ「。む」謂きたり「。り」抑す「。ハ」漢文「。こ
 あつれハ。將字「。こ」あ「。ま」詞「。ま」て。截断「。ま」
 連断「。ま」なり。され「。バ」こ「。そ」即「。ま」く「。わ」て「。ま」せ「。く」も「。古」し「。や」う「。ま」用言へ「。は」ぐ
 け「。も」い「。ひ」又「。あ」ら「。ま」く「。を」ん「。ハ」見「。ま」く「。の」わ「。く」ま「。つ」つ「。も」今「。な」も「。断
 こ「。い」ひ「。ち」も「。つ」つ「。へ」る「。た」ら「。ん」う「。く」て「。ん」より「。為」て「。く」ハ「。さ」ぬ「。へ
 さ「。こ」も。又「。其」ま「。く」を省言「。ま」よ「。の」み「。い」へ「。る」も「。げ」こ「。つ」れ「。の」事也。され
 む「。う」の「。あ」ら「。ま」せ「。バ」な「。の」を。佐行下二段の活言といひて「。も」又諸
 活用言の通例「。ま」異なり「。て」は「。ま」せ「。ハ」將然言を受と思ひ「。も」皆「。あ」ら
 ぬ「。ひ」が「。心」た「。ま」て「。し」た「。ら」あ「。う」のみ「。あ」ら「。む」の「。石」塚「。氏」の「。い」ひ「。一」限「。り」也。

まづ宜かりしをそれにつきてとらひひて世にいたる蛇足を
のたふひなりしをよとらふよをかくまて記し置はるのうらや
越えうの略図演説閑書し人の物せがもや世にあらむひあめ
るまへ山口栗などにもこれがいひざるよかざりしあま世にそれ
れきたててつららんませむの事也我具玉録三
卷八丁のうらやまめん

七三 行

欲字よりうら意のわてハ行四段より活くまてえ知きたる
事なれど有といふ詞のゆくを連用截断の二をくぬといひハ
唯連躰言なるのみの活語せしむべくや又ハつねの四段の活言にて
取去など同くハ唯連用言にてルナン截断連躰の二をうぬ

る詞といふへくや又此二種にも同くらむと云べくや万葉に欲りと云
居多て截断せりとれちりさもありハそれとも玉緒線分上へへる例
もの字の結句のつらや
や又考らふ夕されをひざしきなく信約ひこえてそ昔か来るいも
目乎保里とある十ナ
五ナをどハ欲りまると上へへるさぬなるより
たもハ截断して云居またるか如きも実と言外の余意有らん
とも思はる四ナ五ナハある行手欲焉君之目乎
保里をとも上へへるならん極推知
かの有り活同きなるうらや万十九卷六ナに谷をく云伎可麻
久得里登あしとハ云といまざる截断言をうらや一定に登の
群して里をうけたれハ此欲りハまきしかの有りといふ詞と全く同
く活ならんまづハたもたうなり続千載に世をハさうまくやし
してのせまへるをうら保里登といふ

とむし人も解り 然るに又正集廿卷^十三秋といへども見麻久保里香^〇聞
がてよせしをらん があるをうれハ、そべ^〇うもな^〇といふ辞ハ、あ^〇ゆる活語^〇一巨
りて大く連射言を受る空りなるからハ、^〇にたや^〇といへるハ、万葉^〇
言をか^〇し^〇け^〇たり^〇と^〇え^〇る^〇た^〇ひ^〇も^〇を^〇り^〇く^〇と^〇う^〇れ^〇ば^〇、^〇さ^〇れ^〇ハ^〇あ^〇か^〇れ^〇り^〇ハ^〇截^〇を^〇
言として^〇れ^〇さ^〇ら^〇ら^〇、^〇か^〇し^〇の^〇辞^〇へ^〇う^〇れ^〇る^〇也^〇といふべきにも似されど、^〇た^〇ら^〇を^〇
保里香^〇聞^〇といへるハ、^〇正^〇文字^〇を^〇辨^〇え^〇へ^〇連^〇く^〇言^〇と^〇せ^〇る^〇事^〇で、^〇か^〇る^〇も^〇つ
れ^〇の^〇な^〇り^〇 四段の活語^〇も^〇一^〇ハ^〇も^〇と^〇り^〇にて、^〇少^〇し^〇と^〇や^〇う^〇なる^〇彼^〇有^〇り
居^〇り^〇か^〇ど^〇の^〇詞^〇にも^〇え^〇え^〇ぬ^〇変^〇例^〇にて、^〇さ^〇る^〇語^〇格^〇ハ^〇あ^〇る^〇べ^〇く^〇も^〇れ^〇も^〇と^〇れ
ね^〇む^〇こ^〇も^〇例^〇の^〇連^〇用^〇言^〇を^〇辨^〇え^〇に^〇な^〇ら^〇し^〇に^〇ぞ^〇ら^〇ん^〇、^〇そ^〇も^〇う^〇ら^〇う^〇も^〇か
い^〇の^〇こ^〇も^〇を^〇け^〇も^〇取^〇る^〇治^〇る^〇な^〇ど^〇に^〇て^〇も^〇、^〇か^〇り^〇居^〇り^〇な^〇ど^〇に^〇て^〇も^〇、^〇い^〇つ^〇も
あ^〇し^〇し^〇る^〇、^〇文^〇字^〇よ^〇う^〇う^〇つ^〇つ^〇て、^〇花^〇の^〇教^〇る^〇も^〇う^〇れ^〇く^〇も^〇あ^〇る^〇か^〇ど^〇の^〇み

い^〇ま^〇た^〇る^〇定^〇り^〇な^〇る^〇に^〇あ^〇り^〇か^〇も^〇と^〇い^〇ひ^〇て^〇ハ^〇其^〇格^〇も^〇た^〇が^〇つ^〇れ^〇た^〇、^〇有^〇り^〇か^〇い^〇治^〇
な^〇い^〇へ^〇る^〇ハ^〇、^〇世^〇は^〇正^〇ハ^〇イ^〇韻^〇で、^〇文^〇字^〇を^〇ハ^〇連^〇用^〇截^〇断^〇連^〇射^〇の^〇三^〇つ^〇を^〇う^〇ね
さ^〇ら^〇う^〇ら^〇ん^〇、^〇世^〇は^〇正^〇ハ^〇イ^〇韻^〇で、^〇文^〇字^〇を^〇ハ^〇連^〇用^〇截^〇断^〇連^〇射^〇の^〇三^〇つ^〇を^〇う^〇ね
る^〇詞^〇と^〇み^〇て、^〇な^〇よ^〇り^〇こ^〇ハ^〇別^〇なる^〇活^〇語^〇で、^〇こ^〇れ^〇ハ^〇活^〇の^〇語^〇も^〇な^〇く^〇ひ
と^〇う^〇だ^〇て^〇る^〇者^〇も^〇云^〇へ^〇さ^〇う^〇と^〇思^〇ひ^〇い^〇る^〇も^〇う^〇ら^〇う^〇と^〇こ^〇ハ^〇よ^〇く^〇思^〇ふ^〇、^〇
こ^〇ハ^〇前^〇よ^〇云^〇る^〇や^〇く^〇用^〇え^〇つ^〇く^〇言^〇を^〇射^〇言^〇に^〇し^〇て^〇の^〇み^〇と^〇定^〇む^〇る^〇を^〇定^〇む^〇
る^〇べ^〇き、^〇然^〇ま^〇む^〇ま^〇む^〇か^〇の^〇保^〇里^〇香^〇聞^〇も^〇射^〇言^〇う^〇け^〇た^〇る^〇香^〇聞^〇と^〇い^〇へ^〇、^〇さ^〇て
又^〇こ^〇れ^〇ハ^〇む^〇さ^〇し^〇い^〇ふ^〇言^〇の^〇そ^〇も^〇れ^〇と^〇え^〇し^〇、^〇貪^〇る^〇ハ^〇論^〇た^〇く^〇四^〇段^〇活^〇き
な^〇れ^〇バ^〇、^〇欲^〇ハ^〇も^〇と^〇う^〇四^〇段^〇活^〇と^〇云^〇へ^〇く、^〇彼^〇さ^〇う^〇ま^〇く^〇を^〇あ^〇り^〇と^〇い^〇へ^〇る^〇を^〇
え、^〇何^〇ま^〇も^〇連^〇用^〇え^〇に^〇て^〇い^〇ひ^〇さ^〇た^〇る^〇に^〇て、^〇或^〇え^〇上^〇へ^〇う^〇ら^〇り、^〇或^〇え^〇外^〇乃
余^〇意^〇を^〇含^〇み^〇て、^〇其^〇言^〇の^〇を^〇さ^〇ま^〇る^〇処^〇ハ^〇別^〇よ^〇あ^〇る^〇を^〇考^〇へ^〇つ^〇へ^〇さ^〇に^〇ぞ

あらん。高いたる、①韻をさうく詞とせるハ。居り有りあど多くハ物の
然るをいふ詞なるを欲ハ物をあつるにて。さうハ大う。四段活なる例。
羅行ハ殊ニ多くれた。今もこハ全く取る釣るなど。内ハ活と云て
凡有べらん。甚野ニわらみれば。堀ニ掛りて詠める例。雑もあり。

七四 ことば ことば

いつそや紙魚室にてある。の云かて。近頃ある書。今世さうくと
佐行四段活。乱字ニある詞をつくハ。古ハなまきり。古ハ羅
行四段。こそ云つれと云るを。けり。くべなれつ。ハ雑話
十三の条なる吹み。らん。をよ。ろ。れ。もと荒木田氏の
いふ。み。無用のる。と云べく。彼一条のあるやうも。今少し書と

らせんやう者へさ。やうの兼盛集。吹み。そとあるなど。猶後
人のうつ。誤と定むべきハ。そにて後撰。吹み。そとあるを。ハ代
集抄。と。とせるハ。写ひかめたる。古今類句。吹み。そとあ
るを正しと取て証へさやうの事。もま。い。つ。な。なり。と。そ。れ。を
え。け。る。ハ。い。う。に。と。ある。を。さ。く。け。を。く。よう。げ。なる。論。め。と。そ。う。け。玉
を。ら。る。但。い。く。古。く。も。何。れ。の。詔。詞。に。な。る。ん。と。い。ふ。こと。の。あ
りて。之。の。字。さ。う。ある。も。あり。し。や。う。に。れ。お。ま。ば。佐。行。四。段。こ。そ。に。
と。活。く。詞。た。え。て。な。し。ハ。猶。い。たる。ま。く。や。け。ら。ん。など。物。後。り。け。ひ。け
る。事。け。り。さ。さて。後。れ。り。ひ。ら。る。ハ。此。云。自然。の。ハ。羅。行。下。二。段。こ。そ。
らく。詞。使。然。の。ハ。内。行。四。段。と。佐。行。四。段。と。二。く。活。さ。て。と。と。と。と。云

もさうと云ふ。大くハ同書あり。その物をあつてゐるからにて。輕重
をさうと云ふ。聊のけちめハある事ならん。輕重の吳いさうつくの詞せ
の事(世)一条みて考へし。と云ひ
つ尋ねれハ。の古くもといひつるハ。三代実録十七卷なる故実手澆
之賜布奈の詔くれよて。くるようたもハ。佐行四段よて。と活くも
古くよりのものと尚りよべし。更ニ思居りしに。近頃出雲の国造
のさみより。此自著をみてあつてころも。うづバなま。みくらひの
せうそこし。となく此那能歌語と領せる書を繕らせらるるを披
きこれハ。かの千楯のさま。ハ。世書のさみサリとめられ。きて
つらく。其書をよめバ。うさうと。いふ詞を論じ定めませるやう。
げし。つむらありと深く感入ぬ。あつてあれと。ささにたもひ

入しけよや。いとゆる澆太之。をさへ字誤ならんとハ。扱えあひよられ
た。まきて此歌語。これもそれも字誤と定められ。さうともの中
も。かの源氏推本の親のらをさう。さむやあらん。の語。又世にせん
たは名神番あど。いづれもあなからし。誤とハ云ま。さやうにぞあふ
さうよ。うて。風雅集なうらう。数多うりても用あられぬ詞とさう
の定め。さう。かくいふ。さやれ。あつてハ。なうのひ。う。あ得。や。
(七五) 用言躰言を虚字実字にうつしてつきての贅論
用ハタラさうごく言ども。からり。あて。い。虚字と云るに。おことバ躰言
た。実字になど。山口葉ナ云つるにつけて。さくに初学の爲。一箇び
てこと。うり。さへ。さみ。う。そハ世。う。あ。のよ。さう。と。初学びを教

ふとける書どものあるが中よりいへるやう。たとへも寫出谷といふ歌を
得たらんこゝハ。出字をを必よそにせめて尋ハよむる。それを実字
と云也。又野外霞といへるなどハ外の字必しも要とはあらば。を
てよまでもあるべきそれらを虚字といふ也といへるなり。或は
詩林良材。虚字言葉実字言葉と別ちむへる。是ハ大ニ同
一ニナレト尚
のこハ言同意別なるぞかし。同つ文字も死字にならと活字になれ
るとにてるきハ虚実射用をささ示せる也。さるハよろしきやどの
人ハいまだとも濫へてあるべきなれど。むげのをさるべき虚実射
用の文字の目さより。もし紛らうてあやしみを生さへうとて。
くゞくゞうらるさるれとかくまをいひかく也。抑用言もさる語み

言ことばのうの虚実死活よりさるよりハうらのやまの書といふさう
はてもかよもいれぬ。たのづからもよくあらる事なるをや。

(七六) 連射言已然言の上よりのうりよて。擗カて截断言と

まれるを。れもこの語格を受る辞してうらる例。

詞玉緒三三十一。ぞのむまびをたまをがう猶下へつゞきたる奇ナといふ
一条より引る後撰十一の。あひみてハたうさむやとぞ思ひ二。ちぢり一も
こそ恋一かり二れ一とある。これハぞのむまびハ一といへるにて其処ま
る詞となる例たるを。なわづく詞を受るに。うけうけて下へつゞけ
たる也。ぞの結詞を全ながら尚下へ続けざる也。さて是れ全く同例
とみて次ハ堀川百首ある。播ナがさうらみてのぞ一をさ二うら一ど二こ一よ

ひるめらふの松原とあるをしかせれど。又それともむさうし
 して。ぞの結びハ連躰言。なるべきを。そををくは已然言
 といひ。さてそををばつね。こ上。かいる辞なくしての時。こ文る辞のど
 こそつけたり。うの慰むや。ぞ。思ひ。ハ。文字つね。ハ連躰言に
 ては。といひ。辞して交る空りたるが。ぞ。のかり。して截断言となれる
 うへ。その截断言をばうくべき。こあらぬ辞の。こも。ハ。つづくま
 じき。空りあれど。それをうくよみ。つづけたるなり。堀川百首のハ。こ
 る例。こあらぬ。うらみ。ての。ぞ。こ。う。ど。といへる。ハ。畧。図。ミ。べ。
 持然えけ。截断ハ。連躰ハ。ある詞の活き。已然言となれる也。
 されハ。これハ。こそ。のむまび詞也。それを。こそ。のむまびとせぬをりえ。

は。ど。を。と。交。る。終。て。の。例。也。さて。今。ハ。ぞ。の。結。び。あ。る。ハ。な。る。へ。き。を。バ。
 して。活。ら。う。して。下。へ。つ。け。た。る。こ。を。あ。れ。さ。れ。ハ。玉。緒。に。て。も。次。
 十三。又。○。ぞ。の。結。び。辞。を。轉。う。して。下。へ。つ。け。た。る。分。と。て。玉。葉。二。なる。雷。
 十。ぞ。よ。そ。よ。ま。つ。れ。ど。さ。う。う。花。を。ま。て。ハ。似。よ。る。む。な。り。う。り。と。い。へ。る
 ち。ど。を。つ。ら。ね。た。る。その。つ。ら。よ。い。る。へ。き。に。ぞ。あ。り。ら。る。さて。又。後。拾。遺。六。
 の。ね。ま。ど。く。ぞ。雷。つ。り。ら。ん。と。思。へ。ど。も。君。あ。る。さ。と。ハ。ん。ぞ。と。え。る。
 といへる。奇ハ。ぞ。の。むまびら。ん。さて。と。ハ。な。べて。ね。る。詞。を。受。る。こ。と
 づね。定。ま。る。例。ち。れ。ハ。こ。の。う。た。の。て。よ。を。は。た。い。さ。う。を。べ。て。の。格。こ
 具。な。ら。ぬ。を。や。と。ぞ。れ。も。え。る。さ。て。又。ま。う。へ。り。て。い。え。ん。栄。花。物。語
 所。宴。卷。の。詞。こ。宇。多。の。御。門。ま。み。こ。ち。あ。ま。う。さ。た。ま。う。さ。ま。う。さ。ま。う。さ。

中一のみ敦仁親王と申ける。位一つうせ玉ひける。こゝハ碓鞠の聖
帝と申して世中二天の下めてたまため一引なるといふ。こゝえり。
これハ申ける。位一つうせ玉ひける。にて結をんで。試けるま
で。一截断言と申す。こゝハ一つうせ玉ひける。の生りなれど。こゝ
え上。一どといふ。ざるをりの違躰言ける。を交る例なる。こゝにてあか
うけつ。下へつ。けたる。これしい。ある。あま。さむや。と。あひ。ま。の
例。一り。これハ。詞玉。緒。う。り。け。よ。い。ふ。べ。さ。み。な。れ。ど。ま。づ。も。初。学。の
後。一。ま。え。さ。せ。ま。お。一。か。ら。に。よ。り。て。さ。か。か。く。た。む。（一）
を。こ。つ。れ。と。い。ふ。さ。ら。さ。る。か。さ。は。て。云。ふ。也。ふ。と。い。れ。ハ。こ。れ。ハ。一。つ。う。せ。玉。ひ。ける。に。も。あ。ま。さ。む。や。と。い。ふ。ま。づ。も。初。学。の
月。穿。た。る。安。和。三。年。と。い。ふ。ま。づ。も。位。一。つ。う。せ。玉。ひ。ける。に。こゝ。ま。ま。さ。む。や。と。い。ふ。ま。づ。も。初。学。の
ま。づ。も。の。こゝ。ま。ま。さ。む。や。と。い。ふ。ま。づ。も。位。一。つ。う。せ。玉。ひ。ける。に。こゝ。ま。ま。さ。む。や。と。い。ふ。ま。づ。も。初。学。の
と。い。ふ。ま。づ。も。の。こゝ。ま。ま。さ。む。や。と。い。ふ。ま。づ。も。位。一。つ。う。せ。玉。ひ。ける。に。こゝ。ま。ま。さ。む。や。と。い。ふ。ま。づ。も。初。学。の

の例一ハ非也。恨ての。[一]こゝは非也。はれをよく。こゝへま。ま。ま。さ。む。や。と。い。ふ。ま。づ。も。初。学。の
擬して。念仏心ヲモチテ。無生忍ニハ入。カ。を。考。へ。ま。ま。さ。む。や。と。い。ふ。ま。づ。も。初。学。の

(七七) かのか
人のかき
のなり

あま。さ。む。や。と。い。ふ。ま。づ。も。初。学。の。後。一。ま。え。さ。せ。ま。お。一。か。ら。に。よ。り。て。さ。か。か。く。た。む。
む。ち。の。む。の。一。音。ノ。省。り。タ。ル。ニ。ハ。侍。ラ。ズ。ヤ。人。ト。人。ト。物。語。リ。ア。フ。辞。ニ。云。え。あ
り。あ。ん。さ。ら。さ。る。か。さ。は。て。云。ふ。也。ふ。と。い。れ。ハ。こ。れ。ハ。一。つ。う。せ。玉。ひ。ける。に。も。あ。ま。さ。む。や。と。い。ふ。ま。づ。も。初。学。の
レ。ヤ。ウ。ニ。オ。ホ。ユ。ト。教。典。ガ。向。ヘ。ル。ニ。△。ソ。ハ。源。氏。ヨ。リ。モ。古。ク。万。葉。ニ。アル。王
の。を。七。ニ。出。セ。ル。如。ク。ナ。レ。ト。今。死。き。ハ。ナ。ド。ハ。ソ。ノ。恋。人。を。ナ。ド。ノ。例。ナ。ラ。シ。玉
も。か。ま。て。ん。な。ナ。ハ。イ。フ。ベ。ク。モ。ア。ラ。子。バ。ト。イ。ヘ。バ。又。向。万。葉。ニ。た。び。ハ。と
る。あ。い。我。も。ふ。れ。る。子。等。ハ。あ。え。あ。い。う。う。枯。せ。あ。い。う。ほ。れ。て。せ。ま。く
ナ。ド。ノ。あ。い。ハ。ぬ。ノ。意。カ。△。シ。カ。ラ。ズ。ミ。ナ。ま。む。う。ち。ト。イ。ヘ。ル。ニ。コ。レ。ニ。テ。彼

死ありモあるん。ニ非ルナドレルヘレ。又問ハク。亦万葉十七卷 玉緒引
意の如ニ。義奈字良波倍底奈。此ハ契リなきナドノニテモヤアラン。
ノ奈ニ
 △謂然ラズ。コレモてむうてきハル。又曰十四ニせなとつまふハつまむ
 ノコ、ロカ。△謂クレカラス。コレハつませノコ、ロ。ちやうへりねナドニ同
 ク頼フ意ノ終トイラフレハ。又因ニトテ向。田時乎 知不 將為をな
 ちらノナドハ不知ルトル。モジノソハリタルモアリテ。ぬニ通フルニハア
 ラデ。ちらむに。又あむむ。トヤウニコ、ロウベキカ。△謂コハ。直ニむ
 也。不字ニアタル。不知ルトカケルハ。不ヲルトヨムラセラタル。サテ
 序ニ云。コノをハむびなきせん。ナド他ノコモイ。又あむむナド自
 ノコモ云。カトハ別ナル。記傳玉緒合考テ曉スヘシ。徃復したる。

奈万之奈中卷 九 を校正に付ての討論してそ有し。

(七八) 牟智麻呂 ナチマロ 申御名 ウケノミナ 就て茂 シ と云詞の形状と作用との二の活の 二ハ向
△ハ答

伴信友の江戸よりかゝらひねこせ一文云。○藤京武智麻呂公傳
 1. 左大臣諱武智麻呂 マロ 義取 マシ 茂榮 モト 故為名焉 ナリ とある義一據りて
 考るに。武智ハ字音のまくに牟智 ムチ とあるへて。茂 モ とつくと同也と
 思ふといふに。△義門答。げこある事をらん。但し義取茂榮の四文
 字も。ギラムクサカユルニトルとよむべく思はる。まづ茂字モシモクと活
 きて。たわく字音と似たる云云と次下の細註のゆへも。既くコク山
 口采も万葉かと引て云。復たるを。今此脚考よりうへ尚考る。茂
 字にあくる形状言 アリカタコトハよむ也。此ハ鈴木
眼の言語四種論ある名目より。シキクと活く活ささぬ

ことなる事ハちけまじ発音も此はモユハムシムキムクのハニ口なる
べし。次下ニ細注して出たまへる万葉乃木丘さく道これそれら
茂字をどをむくといひへ証して云へし。さるハ木ハ韻鏡にてら
みるにもと蒙の入聲にて。呉の正音ムク也。磨光者の三音正語の説ハ
ちク、の謬して。太田全齋の音図音徴の定考ぞよき。然るに漢音
ボク吳モクとハあつさうにさ呼びたりたるにて。さハ文ハ吳音の
正さもとムシかんじ。モンと呼まらるに同ト。木槿木瓜とかくを
ムクゲとハ今も云るにあらざや。木の正音もムク也。さううら
万葉ニ木丘さくとあると。此藤原公の御名の武智とをみて。茂字
は當まらる形状言のもといひむむむむくといへるなるををるべく。

さてハ茂榮ムクサカユルといひへし。こを思ふるれ。をわいてく。統日本紀大
加ル云々もあるもむくさけくむくさけく活言にて。むくむくと云々大目忘の云々
覚しさを考ふべし。又木字の音の夏ハ。和名抄云。木變子にて。さうさう上。むとの
一音一用ふたりハ。延喜式。木ユ寮をムクといふるにて。知るべく。又ムのモと博考の例
。万葉ニ八年久良も六倉もさうけのり。和名抄ニ八年岐もある類考へし。杜を字鏡ニ
牟弥とある。又本州和名ヲ。夢をも岐と。和名抄ニ八年岐もある類考へし。但し毛字モ
とのミをうらハ後の事にて。古ハム。うらなるなりといふも。又南無南無をハナムともナモ
も古書ニハ見えたり。
○其ハ邑葉字類抄ニ。茂木茂盛也。モシ。ま。藤草
るをとも考へし。
茂也。モシと見え。神代紀ニ杖疏モシ。玉篇杖疎木四。尚書禹貢ニ草繇木條モシ。孔安
注。繇。とよめる。モシ。これなり。△こもさくの活なる証もにて。友々みみ
一段の凶考ふべし。○古語拾遺元祿印。蕃茂ともいなり。万葉集。水傳ふ
つ。木丘開道手又みちんかもある木丘も茂也。又志神紀ニ蒼蔚をモクシゲシともイケル。
蒼蔚の字。毛詩曹風の詩句にもあり。草木盛多貌と註せり。道ハ古文眞室のせたる録
賦の豐草條。而爭茂をモキともいなり。茂さ茂く又茂し茂き茂きり。△こハも文
言なり。たまた茂字の音の似るをもて漢字音をらんとれり。ひまへへん。△こハも文

字を考ふるに、友鏡才八段の活きなれハもトハ友鏡才四十二段の因コトスニ
 たる用言にて、モサンモシモスモセと活くなりへ。此事下向コトよりて
 考えたるハ全く君の賜コトまん。ついで「^{シヤ}の蕃^ト」
 これも「^ト下向コトよりて思ふ」。友鏡四十二段の必なる活語にて、レカン
 レキレクレケと活く也。り。う。う。て古事記傳六^ニ。重浪又まみの志しく
 云。り。る。重も。本此蕃ト同意。<sup>古神祇遺ニ重播を註して志伎麻伎とある。これを
 大按詞一ハ類辭と云。大神宮儀式帳一ハ敷時</sup>
 あることくらに明めたるこちも。○細註「茂き茂く又茂ハ茂も茂
 せりかど活く也。△「ハ茂ハ茂き茂くと活き。又ハ茂ハ茂もハ
 うにも。さて又茂せり茂せるなども活く也」と辨へり。い。べ。き。処。ぞ。さ。ら。う
 又上コトへる如く。友鏡の才一段と才八段と才四十二段との三の活用

あれハなり。<sup>深字ニ常る詞ハあ。う。ハ。あ。ふ。と。活。き。又。深。さ。ん。作。し。深。さ。と。や。う。に。も。さ。て。又
 深。さ。り。深。せ。り。な。も。も。活。く。語。あ。ら。う。云。へ。さ。か。ご。と。さ。と。こ。ろ。と。こ。そ。あ。ら。う。れ</sup>
 ○かくて人の名「茂」をモチキ「シ」ゲある訓めりも同義にて。<sup>邑。乘。字。類。抄
 二。え。え。姓。名。録。抄。を</sup>
 一。え。え。モチモシを通音コトにして言ひあらひける上よて、其モチの
 モのム「通へバムチ」といへるをとりて、藤原氏の「末葉」^{モ。ト。ハ。末。也。上。の。件。リ}
 うゆらんころの布さびとりて此公の名「つさむへる」にぞ「うらへま
 △モチをムキとせるにえあらむ。む。あ。ハ。も。と。なり。も。ま。ハ。末。也。上。の。件。リ
 一辨へたるが如し。こハ脚考うらうへのやうなり。さて又思ふ「武智
 ハリ」ムシととあへ「へ」に「あ」ら「さ」る。そハ智の字「音与真同
 と云る韻書も「われ」也。とて知照往來と云へ「さ」趣もをり。あ
 る「うら」考「あれ」も「さ」い「れ」ぬ「へ」く「や」上「向」コト答をまへ「書」て

かづりことせしむらうらま。さて此の事山口東あるひまを

を少く改むるを今春四編合考てよ。

七九何^三なる何^三つる。何^三なる何^三なる何^三つる。

城戸千楯ノワレニカタリテ。詞玉緒ニい^くよハ糸スえぬハい^くはハつノ類

ラバてこそを更格ノ一例トセラレタルニツキ。近ハ非ハ見ハけハらハしト云ル周防人ノ活言徑ト云物

ラミルニソレニ云ハク。宜長が紐鏡十九段のぬ。廿段のつ。是をい^くの結ひこれ

く更格之事。此ハい^くと云ても下ハい^くとい^くぬ時ハ必^ズぬつとた^くか^ん。又

トよかといへを必^ズぬつると結ハせ也。又廿六段のつ廿七段のぬ。此二段にて

たぬつと結ハふことた^くい^くとい^くハカ文字あ^つても必^ズぬつると結ハふ

らうハ上トト云へリ。ゲニ然ルハ狄。イカニ思フト城戸云ラキ置テソラ

ツラ考ルニ。凡ソい^くト云ル未ラ截ル。詞ニテ結ブハぬつハニツニ限ルニ

モアラス。又ぬつと結ブハソノ本ノカ、リ必^ズい^くニ限レルニモアラス。スベ

テい^くい^く。或ハ各ハど又たれナド何難等ノ字ニ當リテ問カクル意ノ

辞ノ治リニテ。即向カクル意ノ処ラハ連辭言ニテノミヲサメタルベ

サメタル例コレカレトアルハナルラ。其中ニモ本ライハユルハい^く未ラぬ

つト云ルハゲニ殊ニ多ク。い^くト云ヒタル下ニウト云ルキハぬつと云

ルハゲニ少カラス。抑ハ類ノ辞ハアハタアル中ニ。あそハ出ズく

たれハい^くい^く。なハイハツレモ用言へ連ケルハい^くはハノミ

ハ。直ニハい^く重ハい^く夜ハい^く結ハびハい^く年ハい^く玄ハナドスベテ躰言へ連

致ト思ハルハモ。自餘ノ何ノ類ニ等シカラヌヤウニ。サレバソノ結ハビハタ

自餘ノ疑辭ドモニ異ルハアルナリトモイフヘキニ似タリ。イハユルハい^く

結ハ大カタ截断言ナドニテ連射如ナルハラサクナキモサリ
 トテコレヲ変格ト云ヘキニハアラバコレニテハモシ未ラハ連射言ニテ
如イヒタランアラバソレヲコソ却テ変例ト云ベキヤウニモ思ハ
 ル。然ハアレド何ノ類ノ疑評アリテ未ラぬ多つるハ多ク向ヨルヤ
 ウノコロバヘはも冬ノ未ニテぬフト苗レルハ然ニハ非ルナリ。イハ
 ユルいくよのくむまびナドノ未ナル孫まぬ。ナドノぬつハ何レモ
 向ヨル意味ト思ハルレハ猶サハ云ヘカラザルカ。何レニレ件リノ
カニ云説ゲニ謂レタルナルベウマツ思ハル。サレドソノ傳説上ノ件リノ
タメル考ヘマツぬノ例ハいくへ越来ぬ。旅の白雲新勅いくよせぬ。御代のま
 風拾遺いくよせぬ。秋夜月秋上いくよせぬ。あまぬ日数一生三

又本いくよの成ぬ。花の下於五小野の里人新後むさしの原統古又
 いくよの成ぬ。いこそゆききね千載よまの下於五流ぢるをどて
続後并ナド云ル哥アマタアリ。いくよの成ぬ。住者の松於五雪の
原五毛衣凡ニナトモ多シ。ナホいくよ世迷ひぬ。月清集上歳つよぬ。凡雅秋中いくよ
 りろぬ。新勅雜四ノ類挙ルニタヘズ。皆截断言ニツアリケル。サテツモ歳まじ
 さつ学の声。続千雜上いくよまじつさをりけ声。新千秋下いくよ夜カサの力を
 やどつ。月清下いくようさねつ。天孫衣新後ナド此モ少ナラス。サテ又コ
 レニ類ヘテニベキガみ近引をいせの月の命りけ山家ト云ル
 ナドモアリ。又活言ニカ文字アルハ上いくようへぬ。加茂のみつり
云々ニ品上ト云ル類ゲニコレヲ皆めるはテぬトノ三ハ
凡雅あまの川のせき一生二

イヘラズ。此レニ景ヘツヘキニテいくようへたる。游の白後於いくへうイ雅

因づる。景のま續古ナド。何レモ連射言ナルヲ考フベシ。然ハアレド

いく。ハルト。いく雑下ハルトニテ。ぬつぬつるノ差必定ル様ニノミ

云テハ猶イカダ有シカシ。紐鏡廿六段ノフハ廿段ノフト同クレド廿七段ノハ十九段ノハ同カラヌヲラウキニシウイヘラヌモアラキワサト

ヤイフ。サルハいくナラテモ向カクル意ナル。カミナレ辞ヲ連射言ニテヲサ

ムルハ多ハ其間ニウモシアリ。興一玉緒四卷廿三丁卅四玉緒一卷ニ三轉證哥ト

出セレド。十六右ノナドハクモシナレド同処ナルヨク

困ナド。ヲ見テモ考フヘシ。カクテ又。いナドハクモシナレド同処ナルヨク

ノ類ニテ彼なる誰いづくいづレナドノ結ヒラ截断言ニテセル例ヲア

一タ。玉のを。出セルヲ視テモ思ヘキ也。ナホ玉緒よりマケ。卷ノそののヤノ結ニ

(八十) 又をれるむかりが女帝花

さき。雑話才二編の序のりつきて。糸の大橋氏がり枕庭

い。けるをりに。ころのふと。まことやりの名をめぐ。の哥よつさ

一。思ふ所ありとて詠うけらく。古今集秋歌をみる。此守歌ら

は。のま。い。ハ。の。落馬のるハ。け。いと。ね。つ。を。を

ま。る。と。ら。る。を。た。い。花。を。の。み。か。り。ひ。た。ら。ん。ハ。作。者。の。な。ま。あ。ら。じ。

こ。ハ。も。と。を。れ。る。サ。ぞ。い。へ。る。こ。深。き。言。味。あ。る。な。る。へ。源。氏。胡。蝶。卷

秋。好。中。宮。本。子。御。讀。經。の。糸。一。昨。日。の。女。房。を。も。け。こ。法。の。ま。え。ね。と

さ。せ。み。ま。ま。り。り。り。と。花。を。れ。つ。け。え。あ。へ。り。又。夕。秀。卷。致。仕

大尾雲井居の教訓の詞、女のかくひまぐ、己たるも却てハうらく覺
 ちるこゝろなり。よゝかく云そめつとあらハたうようそをれてなどし
 かへりゆふ云、これ皆己が情を折まくる意也。但右の二は
羅行下二段の活きこて、そ然ちりこよりの詞、名こめで、のそ、あくさりこあうけ
 をいふ詞也。こハ自然の詞、然の詞のけちめなり。さうかそりハあれど、物こまね情こまね
 くつを思ひをるあどいひつね倍も我ををれてあど羅行下二段
 いひ又こてもそを或ハ我をくる西は三行あどもいふゆり、件のおかたふが
 ままちそれこそ、情のあうはありま、情を女帝花といふたぢよめて
 て、ふぶの春浄の情をのこをりまけてけるぞ、おるを必笑、女を
 一墜落せりと人語るかといをれさういとをうりた也。さうて此情の
ちこそへて多

かろまか
 たなへ、かく志えてこれハ、落馬などの事いさへんよりハ奇が優として
 ちるあうむや、抑この奇歌らそとあるよ、下落ハ旧り、優りぞど
 らぬバねも、いそぬ例なり。いとゆる落馬の事詞書よなくてハ何の事ともせえご
 をりたれバこそ、さハ、如りるの活題あらハハのせられため、よく辨
 ぶべきなり、長廣論せハ、珍らうにをうらう、今これをつらうつきて、細昏の分りハ、我門加よ
 一つるうれさこそそやむし、さうそ初学の為こぞ、さて恒こ俗も云といへ
ちげこそやうこて、沙石集、二十段、理
二折とて、と入えさうなり、即是也。
 ○かうやうこ、持こそうりたう、書とせつれバ、いつうと例のうらさきまど
 こもぬゆるよ、さハとちむるえ霜月十日めて年ハ庚子けい、天保十一年

釋義門

去年秋一冊の稿より、用ひと書りし如くのこゝに、亥辛丑の云九月、いさ様、本よの云より、用おとの云あるを、序者東平乃又、答め、説ゆらば、や菅孫、初ること、一日、まじく、知れを、即そ、日の悔も、そのこれと云へる、小、学、存、え、を、大、く、こ、ふ、も、い、く、思、志、き、と、ど、膨、子、あ、ん、の、下、出、既、く、定、り、あ、れ、を、以、て、一、条、加、へ、た、教、へ、ず、て、あ、ら、う、四、編、を、を、と、思、控、也、然、道、も、一、日、知、れ、を、言、ら、ば、げ、不、然、る、ま、こ、を、と、思、え、ら、れ、た、か、う、ま、う、て、あ、ら、わ、り、ハ、即、小、あ、ん、か、う、く、以、用、字、よ、高、る、詞、乃、ま、ん、の、ハ、和、行、一、段、乃、活、用、そ、と、な、む、我、ハ、思、定、つ、る、也、

天保壬寅九月刊成



明治廿六年十月

京都市下京區
三條通寺町西入南側

開益堂

發兌人 細川清助

前同町北側

同 山中勘次郎

